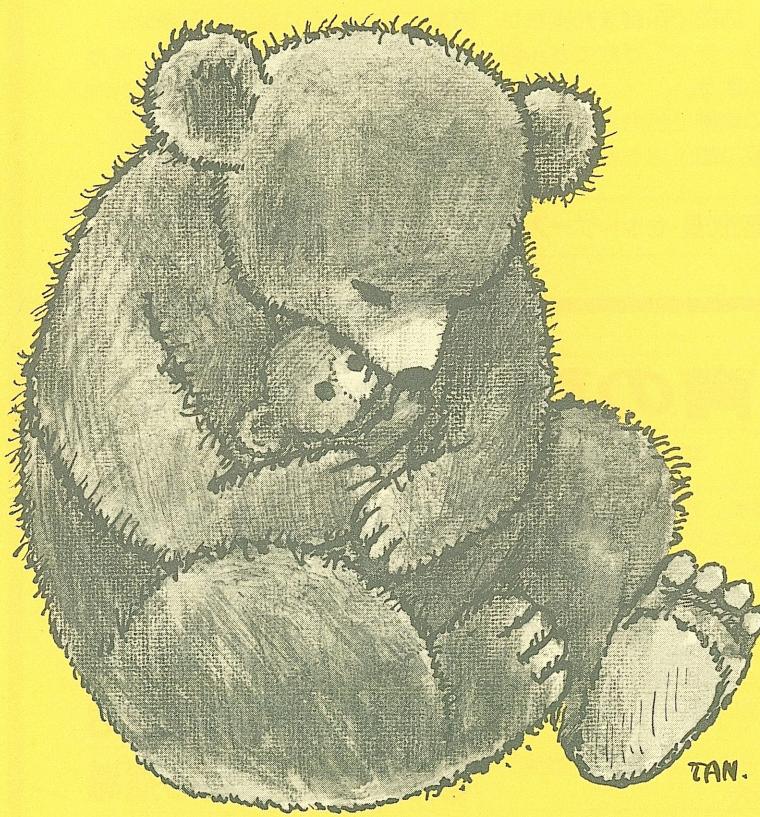
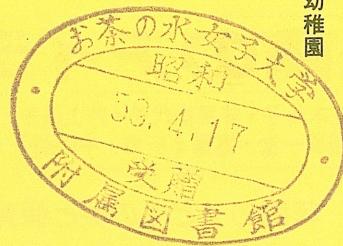


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



第八十三卷第五号

日本幼稚園協会

5

こんなとき "どうしますか" ?

実践での悩みに、重要なポイントやアイデアを、豊富に提供します。

保育のアイデア

春・夏・秋・冬
(全4巻)

関口 準・荒木久子・井尻佳代子・井上道子・岩瀬満佐江・加藤敏子・川並知子
菊地明子・鶴田一女・富重ミチカ・中臣浩子・中村鈴子・平山照子——編著

年間の子どもの姿と保育活動を網羅!!

このシリーズは若い先生方を対象としたもので、毎日の保育を充実させる“保育のアイデア”がたくさん盛り込まれています。

現実に保育の現場で苦労されている先生方が幼児の園生活を春・夏・秋

・冬(全四巻)に分け、それぞれの時期に見られる4歳児と5歳児の、「子どもの姿」の特質を述べ、体験させたい「活動内容」、実際の保育で行なわれた「実践事例」などを、わかりやすく執筆しています。

A5判・各280頁・セットケース付・定価各1,500円・セット定価6,000円

保育の再点検 (全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ(全5巻)です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマを取りあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

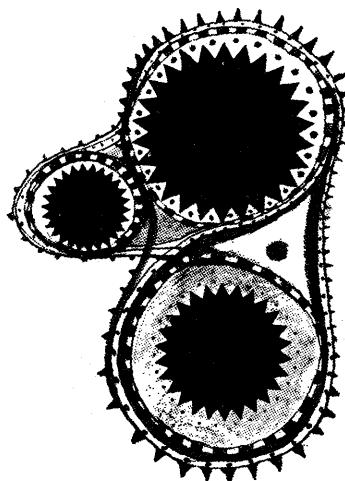
- ①望ましい生活習慣
- ②望ましい集団づくり
- ③望ましい当番活動
- ④望ましい行事と生活
- ⑤望ましい言葉の指導

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十三卷 第五号

幼児の教育 目次

—第八十三卷 五月号—

© 1984

日本幼稚園協会

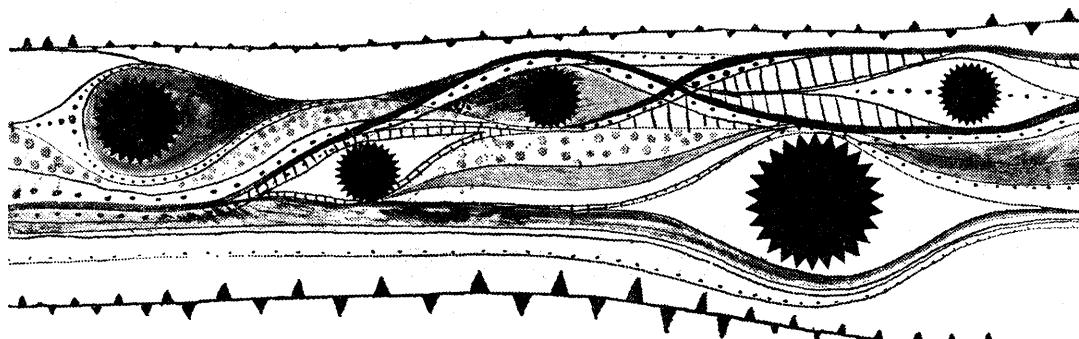
子どもの心をらくにする保育を……………秋山和夫(4)

穴の向うの世界(Ⅱ)……………立川多恵子(6)

雛祭への提言……………石沢誠司(10)

私の保育……………藤塚岳子(16)

園長室の窓から……………市原豊子(23)



細く長く続けるということ

—遊びを見つめる会— 入江礼子…(26)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち③ 村石京子…(30)

私の娘 三上祝子…(33)

写真に寄せて・下崩 阿久沢栄太郎…(40)

ニュージーランドにおける就学前教育の

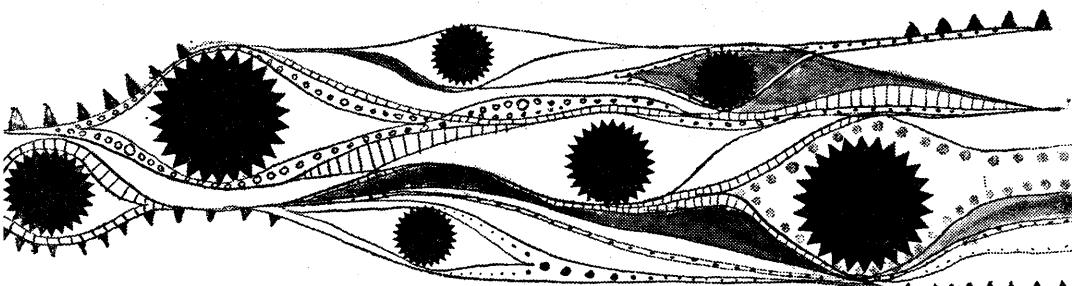
歴史ならびに現状(七) 松川由起子…(42)

☆倉橋賞受賞研究

事故頻発傾向児に関する研究 植屋悦男…(54)

表紙・安井淡

表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



子どもの心をらくにする保育を

秋山和夫

「子どもを迎える第一の用意は、どうして子ども達の心をらくにさせうるかにある」と、倉橋惣三は

「育ての心」の中で述べている。うつかりすれば見過すような、何の変哲もない文章ではあるが、そこでは、現代の保育の中で、ともすれば忘れがちになつてゐる側面を、わたくし達に示唆してくれている。

「子どもの心をらくにする」ことが必要であるといふのは、幼稚園や保育所に限られたことではない。小・中学校においても、家庭においても、必要なことである。むしろ、教育の大原則である、とさえ言つてよい。

学校内暴力事件を起こす子どもは、その学校の中で、心安らぐ場が見出せない子どもである。家庭内で暴力を振るう子どもは、親の要求が高すぎたり、干

渉が過ぎて、家庭内で自分の心をらくにすることのできない子どもである。

わたくし達が「心をらくにする」ことができる場というのは、まずは、必要以上の強制や干渉から解放された場である。そこでは、自分の主体性が保証されており、自発的な自己活動が可能となつてゐる。次には、自分がその周囲の人から信頼され、自己の長所や特技が、まわりの人によつて評価される場である。

こうした条件の下に人間がおかれた場合は、その人は、先ず、自分の心をらくにすることができるのではないか。

現代の教育が見落しているのは、この点である。学習し、あるいは、活動する主体者としての子どもの気持を十分汲まないで、学習させる内容や、活動

させる方法のみを考えることに精力を注ぎすぎてはいないだらうか。子どもの行動は情動に左右されるところが大きいということを忘れて、子どもの気持がどうであろうと、おとの立場で、子どもにとつて必要であると考えられる事柄は、どんな無理をしてでも、子どもに教え込まなければならないと考えとはいだらう。

倉橋は、教育を考える視点として、「ひたすら目的を本拠として教育に臨んでいくか、対象の特質に基づいて教育に臨んでいくか」（「幼稚園真諦」）の二つがあることを指摘している。そして、「幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、いかに能力に相当させるかということを考えるだけではなくして、いかなる生活形態に幼児を生活させるのが幼稚園の真の姿」なのかということが、考究されねばならないと考えられている。（「幼稚園真諦」）つまり、どのような生活を幼稚園や保育所でさせるとかということが、子どもの心をらくにさせうるか否かに大きくかかわっている。

先生の指示のとおりに活動しなければならない。

みんなと同じ行動をいつもとらなければならぬ。

自分の好きな活動をしていても旗や音楽の合図があれば、それを止めて先生の指図に従わなければならぬ。——このような生活が、園でくりかえされているとしたならば、決して幼児の心はらくになり得ないであらう。

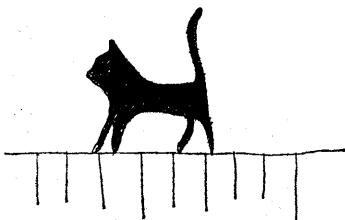
青少年の非行は、幼児期の甘いしつけにも原因の一端があるという世論をふまえて行われる訓練主義の保育も、決して幼児の心をらくにはしないであろう。

幼児期の教育は、倉橋もたびたび指摘しているようく、子どもに情緒の満足をいかに得させるかといふことが前提として考えられなければならない。幼児の自由感と満足感を前提にして、自発的な生活が十分できるような配慮が何よりも必要なことであると考えられる。

（岡山大学）

穴の向うの世界 (II)

立川 多恵子



「こんなにちは」子どもたちはあそびの手を休めてこゝ

ちを見る。

白い紙に鉛筆でこまかい絵を描いている子、粘土を指でちぎっている子、先生とカルタを取っている子、積木で大きな家を作っている子いろいろである。

二十一畳と六坪の板の間の中央にたつた一つ大きな石油ストーブが赤く燃えている。

はじめて園を訪問したときは秋ということもあって、子どもたちは一日中戸外活動に余念がなかつたが、今は厳寒のためさすがに戸外で遊んでいる子どもの数は少

い。

屋内あそびの中で、私が特に面白いと思ったものに「押入れのあそび」がある。先生のお話では、季節を問わず行われてゐるあそびだという。

子どもは何故押入れのあそびを好むのだろうか、私はそれを子どもから学ぶことができたらよいと思つた。

三才児のM子とN子、そして二才児のA子が共に大きな紙袋を持って連れ立つて押入れに入る、お家ごっこが始まりだ。

M子は「さあ、夜ですよ、寝ましょう」といつて板戸

をしめる。(この押入れは、家庭の押入れとちがつて板戸で作られていて、中側にはプリント模様のカーテンがかかっている)

どうやらM子はお母さんのつもりである。子どもたちはしばらく中でもみ合つていたが急に静かになる。

「朝ですよ」というM子の声がする。M子は大きな紙袋をもつて「お使いに行つきます」といつて押入れから出てきた。N子もA子もついて行きたがる。M子は引き返して、お姉さん役のN子だけを連れ出した。押入れの中には赤ちゃん役の二才児のA子が一人残される。二人は部屋の中を一まわりして押入れに戻つて来る。「さあ、夜ですよ、早くねましょう」といつて板戸をしめる。夜と朝がくりかえしゃつてくる。

朝になつてM子とN子がお使いに出ようとすると、またA子が「私も……」といつてついてきた。「赤ちゃんはご病気でしょう」と板戸をしめる。押入れの中から泣き声が聞える。こわいお母さんである。M子は、支配的なお母さん役をみごとに演じている。

先生がやつてきて「電気をつけようね」とそばにあつた懷中電燈を照らす。

A子は泣きやむ。お使いから戻つてきたM子は、興味深そうに先生の手から懷中電燈を受け取る。押入れの中に入つてまた板戸をしめる。中から子どもたちの話し声がする。

「あーんしてごらん、赤ちゃんはやつぱり風邪ですね」M子の声である、どうやらお医者さんごっこが始まったようだ。

夜が来て、朝が来る。明暗、視算的なコントラストのくりかえしが三才児にとって楽しい。しかしそればかりではない。M子たちは自発的に闇の世界に経験をひろげる。子どもたちは闇の中で内的経験を深める。

懷中電燈の出現は、あそびに新しい発展をもたらした。しかしもしもここで懷中電燈が出されなかつたらどんなあそびがつゞいただらうか、私はそれが知りたいと思った。

押入れは、午后になると、男の子のグループに占拠された。T夫は机の上の懷中電燈を見つけると、それをもつて押入れに入る。N夫・S夫・B夫とつゞく。しめられた板戸の中では懷中電燈を照らしてヒソヒソ密談が始まつた。

まる。どんな話をしているのか耳をそば立てたが、残念ながら話の内容はわからない。明りが消える。押入れの中はシーンと静まり返る。コトリともしない。

暗闇のまゝ時間が経過した。しばらくして「やった」というT夫の声がして板戸が開かれる。一番先に出てきたのはN夫である。T夫とB夫も肩を組んで出てくる。

先生は、私にB夫が最近になって押入れであそぶようになったと話してくれた。

押入れは、何時でも入れるものと思っていたので、大発見である。

子どもが押入れあそびをするようになるには、それなりの条件が揃わなければならない。

緊張感の強い時期はむづかしい。

三月号でも触れたが、B夫はセメント会社につとめる父親の転勤で、二ヶ月前にA市の保育園から転園してきた子どもである。

私がはじめて会ったのは、入園して三日目のことだった。その日彼は朝から砂場で遊んでいた。「サッカーショウ」というT夫の誘いにものらず、手近にある器に、次から次と砂をつめて遊んだ。この活動はその後も何日

かつづいた。B夫は三日四日の間に、空缶、紙コップ、破れボールなど、器として使えるもののすべてに砂をつめ尽くす。彼にとってこの活動は、転園による抑圧を解消するための大切な役割をとてくれたにちがいない。

子どもが納得するまでやりとげることができるのは、保育のゆとりである。B夫はこの後、友だちがやり始めた遊びに参加していく。B夫は絵を描くこと、追いかけっこをするなど、あそびを通して転園時の緊張をのり越えた。緊張がほぐれた時、B夫はまず自分一人で押入れの探検を試みる。

次の日も彼は、T夫の外に出ている間に、おとなしいU夫と一緒に押入れに入りこんだ。

今回B夫がはじめてT夫とグループを組んで、押入れあそびに参加したことは、彼にとって大きな冒険に等しい。不安と恐怖の暗闇の中で依存し合うことで心を開く、B夫が気持を開いてT夫と一緒に押入れのあそびをすることによって、T夫と出会えるチャンスが生れたのではないかだろうか。

その結果、T夫とB夫は肩を組んで押入れから出てきた。一時的かもしれないが、T夫とB夫はこの機会にた

しかにつながりを持つことができた。

押入れは夜の世界である。昼の世界に生きる子どもたちが押入れあそびを通して、不可解な夜の世界を体験する。自分一人で通りぬけることのできないような闇の世界、押入れの遊びは子どもにとってそんな世界が濃縮されているよう思ふ。

不安と恐怖の未知の世界で体を寄せ合い、手を取り合つて芽ばえた連帯感がT夫とB夫の距離を縮めていく。

午前中のM子たちの押入れあそびに登場した懐中電燈は、午后もT夫によって机の上から持ち出される。私は子どもたちが懐中電燈の存在を知らなかつた頃の押入れあそびがどんなだつたか知りたいと思つた。

何故なら子どもたちは懐中電燈という小道具を利用することによつて、闇の世界を自分たちで支配することができた。このことは子どもの知的発達を意味することになるのだが、別の角度からみると、闇の世界における子ども們の情緒的経験を浅薄なものにしてしまつたのではないか。私には小さな懐中電燈が現代文明の象徴のように思える。

○園では一時半になるとおやつを出す。今日のおやつはお汁粉である。助手の先生が前日から小豆を煮て用意してくれていた。

子どもたちはそれぞれ自分のコップを持って集まる。一人ひとりお餅の入つたお汁粉が配られる。どの子も夢中になつて食べる。気の早い子どもは食べながら「お代りしていゝ」と聞きに来る。

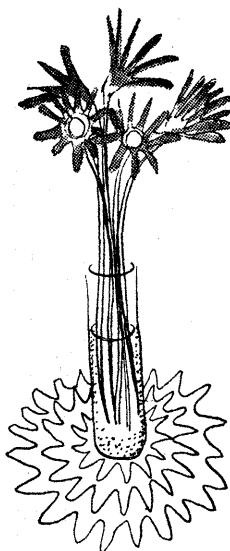
B夫のうれしそうな顔がこっちを見ている。おいしくてたまらないという表情だ。一人がお代りすると、次々に立ち上つてお代りする。大きな鍋がすっかり空になつた。子どもはお鍋をのぞきこんでみて、あきらめ顔をして、一人ひとりコップを洗いに行く。

先生を交えても二十数人の集団は、一つの鍋から同じお汁粉を食べる、小集団ならではの経験といえよう。

(十文字学園女子短大)

雛祭への提言

石沢誠司



今年も雛祭の季節がやってきた。私は日頃から現代の雛祭に対し、少々不満を持っている。それをひとことで表せば、「現代の雛祭は様式化されすぎて、雛祭のことろを忘れてしまっている」ということになるだろうか。なぜこんなことになってしまったのか、理由はいくつか考えられる。それらのひとつひとつをとりあげて、雛祭への提言としてみたい。

雛祭は四月三日に
情ではなかろうか。

まず雛祭の日取りの問題がある。現在ほとんどの家庭は、三月三日に雛祭りをおこなう。しかしこの時期は早い時期といえ、まだ冬の気候の振り戻しがあって非常に寒い時期である。京都でも時々雪がふることがあるほどだ。おまけにちょうど受験期と重なる。新聞に「受験ビナ」などと雛段の人形よろしく受験生の姿が写真で報道されるのがこの季節である。受験生を持つ家庭では、本のみならずその家族のための雛祭もできかねるのが実

ではどう改めたらよいだろうか。答えは簡単である。

日取りを一ヶ月ずらし、四月三日にすればよいのである。現在でも田舎のほうではこの方式をとっているところが結構ある。いわゆる月遅れの雛祭である。

雛祭を一ヶ月遅らすことにより、いろんな利点がでてくる。まず気候が暖くなるから、人形を飾るのに条件が良くなる。寒い時期はどうしても暖房をするので、部屋の湿度がきわめて低くなる。異常乾燥の状態である。こんなところに人形を飾ると、ヒビわれなどの事故が起きやすいのである。

そして文字通り「桃の節句」という言葉にふさわしくなるのだ。ちょうどその頃から桃の花が咲きはじめるからである。もともと雛祭が旧暦でおこなわれていた頃、三月三日は現在の四月三日前後になっていたのであるから、桃の花も咲く頃だったのである。

そして現在、四月三日は受験結果も明らかになり、自分の進路も決つて、若者が未来へ歩み出すときである。学校も休みであるし、家族で雛人形をとりだして並べる

のに最適の時期ではないだろうか。

内裏雛だけを買おう

二番目の問題は、雛飾りの定型化である。現在の雛飾りは、誰でも知っているように、上段から内裏雛・三人官女・五人囃子・隨身・仕丁とならび、さらに雛道具が置かれる。全国どこへ行つても同じで、きわめて定型化されてしまつて。百貨店や人形店へ行き、この雛セットを注文しきえすれば、もう道具立ては完了である。あとは並べさえすればよい。この方式は簡単ではあるが、味気ないではないか。

いつたいつから日本人はこんな雛飾りをするようになつてしまつたのか。私は数年前から、日本の各地に今も残つている伝承的な雛祭を調べているが、日本人はつい最近まで、つまり昭和初期の頃までは、実にさまざまな雛飾りをしていたことがわかつた。

たとえば、写真1は岐阜県明方村みょうがたで現在も行なわれている雛飾りであるが、ここには三人官女もいなければ五



▲写真1 岐阜県明方村の土雛飾り

人雛もいない。しかも並んでいる人形は、みな土人形なのである。また長野県松本市周辺では、現在はしていないが昭和初期までは、押絵雛といって厚紙に布を貼った雛人形を飾っていた。素朴ではあるが自由で個性的なこうした雛飾りは、現在の私たちに雛祭の心を教えてくれるような気がするのである。

では具体的に現在の雛飾りをどうすればよいのか。私は二、三の提案をしてみたい。まず百貨店や人形店で雛人形を買う場合、内裏雛だけにすることである。これは「親王飾り」などと名付けて売っている。そしてこの年は親王飾りだけを並べてじっくりと楽しもう。翌年は三人官女などを揃えるのはやめて、市松人形でもいい、風俗人形でもいい、博多人形でもよろしい、気に入った人形を買って親王飾りの下段に並べるのである。こうして毎年ひとつずつ人形を増やしてゆくようになると、日本にはいろんな人形があることがわかつてくるだろう。

土人形あり、張子人形あり、木彫の人形がある。旅に出たとき記念に買ったものでもよい。毎年最低一体ずつ

増やしてゆくのである。子どもが大きくなつてきたら、いっしょに相談して買ってもよい。こうしてひとつずつ増やしていくた雛飾りは、その家だけしかない個性的なものになる。

また友人や親せきに子供の誕生祝や初節句の祝いをするときは、現金や商品券をやめて人形を贈ったらどうか。何も私は人形業界の宣伝をしているわけではない。

調べてみると明治大正期の頃は、初節句に人形を贈ることが非常に多かったのである。

たとえば、宮崎県佐土原町で聞いた話であるが、この地方では女の子の初節句の祝い物として、親せきや知人が反物といっしょに土人形を贈つたものだという。身近な家だと高価で大きな土人形、つきあいの少ない家だと小さな土人形を贈つた。もらつた家は雛段にそれらの人形をすらりと並べて、近所の人を見てもらつたものだといふ。このとき人形がたくさんあるほど、あの家はつきあいが広い、信用がある、といわれたという。

なかなかおくゆかしい習慣ではなかろうか。こういつ

た習慣は全国にみられ、現在も多少残つてゐる。しかしなんといつても段飾りセットの普及で、贈られた人形を並べる場所がなくなつてしまつたのが、この習慣の衰えた原因なのである。内裏雛の下段を自由に人形を飾る空間として確保すること、これが個性的な雛飾りへの出発点である。

雛祭は男女いっしょに

最後に、私は雛祭を男女両性を祝う行事として発展させたらと思う。雛祭は女の子、端午の節句は男の子、といふ考え方方が現在は一般的である。そして雛祭には雛人形、端午の節句には鎧兜よろいかぶとや大将人形を飾る。私の提案は、この人形飾りを雛祭にいっしょにしてはどうかということである。

こうすると、雛人形といっしょに武者人形が並ぶことになる。都會のかたは何かとまどいを覚えるかもしけないが、田舎のほうへいくと実はこうした飾り方が、昔からかなりおこなわれていたのである。



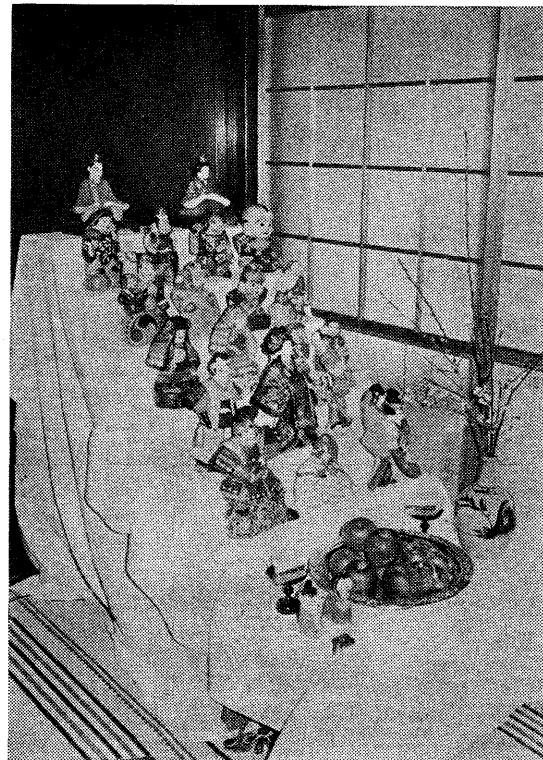
▲写真2 京都府園部町の雛飾り

そのいくつかをお目にかけると、まず写真2をごらんいただきたい。これは京都府園部町のある民家の雛祭である。上段に内裏雛、二段目に武者人形が並んでいる。この家では女の子の人形と男の子の人形を同時に飾っているのである。そして三段目右半分に並ぶのが土人形で、これは京都の伏見人形である。金太郎や天神は男の子の人形、おぼこ（立娘）は女の子の人形である。いずれも親せきや知人から初節句の祝いにもらったり、親が買ってあげたものである。私がめざすのは、いわばこんな感じの雛祭なのである。

また写真3は、1と同じ岐阜県明方村の土雛飾りであるが、よく見ると雛段には福助やえびす大黒にまじって大将人形も何点かある。この村もまた雛祭は男の子と女の子の祭なのである。

よく考えると、内裏雛自体が、男雛と女雛からなつているではないか。そもそもお雛さん自体が男と女を切り離しては成立しない存在なのである。私は雛飾りは、男と女が仲良く睦まじく暮らす、ということの象徴だと思

う。初節句を迎えたわが子に内裏雛が贈られるのは、この子がすくすくと大きくなつて、ゆくゆくはこのお雛さまのように良い伴侶を見つけて仲良く暮らして欲しい、という親の願いが込められていると思う。これは女の子にも男の子にも言えることで、私は男女がいっしょに雛祭をするのはあつともおかしなことではないと思うの



▲写真3 岐阜県明方村の土雛飾り

である。

ひとつひとつの人形が、家族のみんなとつながりを持つ、人形をながだちとして親と子の心がかよう雛祭をつくりあげていけたらすばらしいと思う。

(京都府立総合資料館)

私 の 保 育

——どこまでも人間として——

藤塚岳子

新しい環境の中で

外見からうける自然界には限りがあるとするなら、人間として、あるがままの環境の中で、みつめるより仕方がありません。

昨年に、あたりまえとしてみてきた事柄でも、実に幼児は自然な、素朴な遊びとしてとらえられていることに気がつきました。

また、より深く幼児一人一人の気持ちにせまってみると、今まで肯定してきた考え方にも一歩しりぞいてみなくてはならないことがでてきました。今年一年間の中で、その時々に頭をめぐらせた事柄を整理するつもりで

保育室から見えた山々、緑の中に建っていた園舎、霜ばしらを手にしてみた冷たさ。たった一年足らずの生活の中で、車・電車の音、緑の少い自然にすっかりひからびてしまったのでしょうか。

かいてみようと思いました。

内なる感覚を呼びおこし

素朴なものとの触れ合いの中で

入園当初は、できるだけ戸外で身体を使った遊びを十分させ、感情を発散させるように努めきました。幸い当園には、芝生があり白ツメ草、雑草もあり、町の中で育つ児童たちにもわずかな自然に触れる事ができるのではないかと考えました。

・雨あがりの日、芝生の上を歩いてみると、キュキュッと実際にこころよい音が足元から伝わってきました。

「アッ、○○ちゃんもいい音するね」「先生もするよ、ほら、キュキュだって」と足元をみつめながら感触を味わつてみました。また、晴れた日には、芝生の上でごろごろねころんだり、追いかけまわったり、草をつんだり寝ころびながら、雲や空をあおいだりしてゆつたりとした時間をすごすようになりました。

今まで外で遊ぶことの少い児童たちは、一度眠りからさまされると、非常に敏感に自分の体で感じとるようになります。まわりの大人がちょっとした投げかけや、共

すがすがしい天候の中で、児童たちは、水・砂・雑草（主に白ツメ草）といった素朴なものを使って、こね回しています。毎日毎日同じことのくり返しの中でどんな気持ちでいるのだろうと考えてみました。水は、なくてはならないものになっています。

・白ツメ草と水を容器に入れ、わりばしでつついている児童、草の原型がなくなるまでつついて青い汁が出なくなると、新しい草を入れてそのくり返しを楽しんでいる児童。

・草から出る色がだんだんこくなつていくのを楽しむ児。

・砂をまぜて、沈澱したそのときを楽しんでいる児童。

・水そうの容器に沢山の草を入れ、砂をこしょう、塩にみたて、水をまぜて、色が緑から青に変化していくのを楽しみ、「よもぎもちをつくる」といって製造過程を三、四人の児童と楽しんだりしています。

この一連の遊びをみて、水・草・砂といった

ていて、児童自身の中に入りいれてしまいます。

ものが幼児の感情の中にはあります。それは、変化していくもの、無限に手に入るものの、くり返して同じことができ自分の思うがままになるといったことが考えられます。この遊びの目的は何か毎日、同じことをやっているではないかななどと四角ばった論理は、幼児の世界では無関係であり、反対に、一人一人の幼児の遊んでいる姿から、楽しんでいるものの“何か”をよみとることが大切なのです。

幼児にとって大切なものは

四、五人の幼児がスコップをもち出して園舎の裏を走っているのが目に入りました。砂遊びでもないのにどうしたのかなと思つてみると、手に根つきの雑草を持って息をはずませています。「どうしたの？」と聞くと、「この花きれいやうめるのやんか」と返事が返ってきました。

幼児を理解するとは

た。私は、根がついた雑草を手にした幼児の顔をみると、やっとさがしあてたといった表情でした。「きれいやで」といった言葉どおり、実がついていたり、小さな花がついているのでありました。雑草でも幼児にとっては、大切なものです。

私はプランターを出してきてやり、そこにうえられるように準備してやりました。その日から毎朝、登園してくると草を観察し、水をやつしていました。夏休み前まで続きました。

幼児たちにとって、雑草であつてもそれは自分たちが大切に根元からスコップでとってきたものであるから、こんなにも息長く観察することができたのだと思います。子供自身の考え、手を使って行動したものは、幼児そのものであるのでしょうか。ささいな所で幼児は、あらゆるものを持つ自分の体でうけいれていきます。そんな幼児の生きざまに触ることができ、幼児があらゆる“物”をどのようにうけとめていくのかを大切にみていくたいと考えました。

二学期も半ばになるに従い、一人一人の個性やクラスの中での位置、存在観がはつきりしてきて、遊びの中でも多様なうけとめ方をしなくてはいけなくなります。そんな中で、私は、一人一人が生かされている、本当に自分の世界を持って生活しているとは、一体どんなこ

となのかを問わずにはいられない気持ちにさせられました。

“幼児を理解する”という言葉を私はいとも簡単に使つてきました。言葉の上だけでなく保育の実際の場でも“理解してきた”と思つてきました。

十一月に入り、幼児たちで形の上からもまとまって活動することが多く見られるようになってきて、ふと、感じじる事がありました。“理解した”と思ったのは、幼児のある一瞬の一側面の姿でしかないのではないかということでした。そして、次のある一瞬には、もうすでにそ

のものは、変化したりなくなっているのではないだろうかということでした。自分のやっている事、幼児への見方について本当にこれでよかつたのだろうかと立ち止まつて、過ぎ去った保育のいろいろな場面を振り返つてみました。

“完成した”“続いている”“ということは

一人一人によつて違う

●製作的な活動は、一日では完成せず何日かかることが多くなります。

少しかたい紙（白ボール）を自分で選択して一人で家をつくり始めました。毎日少しづつやって、四、五日かかってやり終えたようでした。屋根はついていない、内部は細かい部分まで作られていて、台所には、なべ、フライパンなどが、かけられるようにしてあります。カーテンもつけ、ドアも開閉できるように工夫されていました。

「先生、もうできた。あそこにかざつておいて。」と言つてきました。（あれつ屋根がないなあ）と思つましたが、この集中度から考えてみると限界のようであるし、ここで「もう少し屋根をがんばつてみる。」とは言えないのです。そのこと以上に、本人は完成したという意識で、飾るということでピリオドを自分でうつたのですから。

●八つ切の画用紙を何枚かつないで、道をかき次から次へと鉛筆をすすめていました。一気にかいたといつた様子でした。途中で鉛筆の色のこさがうすくなつて途中のままにしてあります。しかし、二度とかこうとはしないし、次の新しい遊びに夢中になつてゐるのです。この幼児のイメージと、かき続けようとするエネルギーとがうまくかみ合わなかつたのか、どちらか一方の力が多すぎ

たのかもしれません。

・一人でやり出した町づくりをもう一人の幼児が手伝う形で少しずつすすめられていました。教師は、「○○ちゃんえらいね。がんばってつづきの遊びしてね。」と言葉をかけたことで、本当は、自分でやりたいことがあつたのに何も言わずに形の上では手伝っていました。

ある日、「△△君、今日、あれする？ 僕、もうやらへんでええやろ。」と訴えていました。

教師は、その言葉をたまたま後から聞き、「○○ちゃん、自分のやりたいことがあるのならそれをしたらいいのよ、何もない時だつたら続き、手伝つてあげればね。」と言いました。すると、安心したかのように、「ウン。」と言つて走つていった。

二学期後半になり、思いやり、友達との関係をより広くもつてほしいと願う教師の考えが強くなります。しかし、幼児本来の「自己を充実する」といった基本的なことを押えられるとするなら、何のための願いかわからなくなってしまいます。

幼児が育ついく中で、相手との関係を少しずつ理解していく、自分のわくの中から、外にむけていくことは

大切なことであり、教師も援助していくことは決して悪いことではないと思います。でも、そのことが強く出すぎてしまうと自分そのものがくずれてしまう、とってもデリケートな持ち主の幼児だから、教師がみぬけないといけないと思います。

以上のような事柄があり、幼児にとって完成したものと、続きものは幼児自身が決定するものであるということです。教師自身のものさしでみてしまってはいけないということです。

又、教師の考えの中に、一つのことをやつていたらそれを完成して次のことに移つてほしいというものがあります。しかし、幼児をみているとそんなものではないらしい。昨日まではその事が一番やりたかったことなのでしょう。一日たてば、一時間たてば変化しているんだという考え方になつてば、当然のことといえるのではないでしようか。

『表面的にみると、あきっぽいと映るであろうが、持続の内容は、一人一人によつてその表現の仕方が違うでしょう。又、幼児をとりまく友達関係によつても違うだろうと考えています。やり出したものを納得のいくまでや

ろうとする幼児、友達の動きに合わせて、いつ続きの活動をするかを決めようとする幼児、新しいイメージを行

行してしまう幼児などさまざまです。
言葉で「完成する」「続きにする」と言つても多様なうけとめ方をする豊かさを持ちたいと考えています。

幼児一人一人のリズム、テンポに合わせて

- 幼稚園でこそ、のんびりとした時間空間を確保してやらなくてはいけないし、心理的空間を一人一人に十分持たせることができると考えます。
- いつもまっしぐらで、集中ばかりしていたら、早くできてもさびしいと思います。ぼーとしながら、探し求めていくようなゆとりのある時間を確保してやりたいものです。早くできることは悪いことはないが、幼児期は、時間の区切りのない地平線上においてやりたいと思います。
- 保育の中で、自分の世界を持ちその中で充実させていけば、幼児は大人にすべてを投げ出してくれます。
- 幼児の意志で、その時に感じたことを即、行動に移すことができる時間的空間があるということは大切なこと

です。

劇的な活動の中で、自分の配役をとる時はもう自己中心で、火花が飛び散るほどです。同じ役に希望が集まり、仕方なく他の役をやりながら、二回目、三回目の役まで待つことができるようになってきています。

“次は自分が○○の役になれるのだ”といった気持ちと他の幼児が演ずるのを見て思っているのだと感じます。

「二回目は、私が○○やでね。」と周りの幼児に認めてもらおうとしています。同じ劇であっても、幼児が「私は○○をやりたい」といった気持ちを満足させる時間を与えてやりたいのです。

劇の中で、後半部分しか登場しない幼児に対して、(今は、何もしていないのだから手伝ってあげて)といった考え方をしてはいけないなあ。空白の時間、それはその幼児にとっては、劇の中での時間なのであるから。

こんなことを思つて一人一人の幼児をみつめていると幼児のやつている行動の裏には、その幼児の意味、存在観があるのだということを改めて感じました。

幼児の失敗したもの、ゴミ箱に すべてられているものから

毎日、何かをしている。一つのことをするのに、いろいろな試みがなされています。その幼児の過程をたどつてみると、とてもゆかいになつたり、何とも言えぬ気持ちになります。

• ほとんどできあがつて いる状態のもので、くしゃくしゃになつています。どこが気にいらなかつたのかわからないが、その幼児にとってはだめだったのしよう。

• 小さく切りとられたものをみると、幼児がチヨキチヨキ切つっていくその気分ちが伝わつてくるようです。
• 何枚か同じものがかかれり、部分的に鉛筆の力の入れ方が違つています。その幼児が？ したい？ したがつて いるところが見えてくる思いです。

• いっぱいいろいろなものがかいてあります。頭の中がいっぱいだったものをはき出したほどです。さっぱりしてもういらなくなつたのかなあ。

こんなことをあれこれと考えて いると、幼児の生活は、あらゆるところで、そのぬくもりが残つて いるんだなあと感激して しまいます。

教師が、一人で保育し、支えきれない部分を、一日の保育が終わつた保育室で思ひめぐらしていると、一人一人の顔とその時の情景がうかんできます。
無言のひとときを味わえる自分でいたい、そんな心のゆとりを持つて いたいと思つて います。

(三重県・桑名市立修徳幼稚園)



園長室の窓から

母の日、父の日プレゼント

市原豊子

日々の保育の中で子どもたちが生き生きと活動し、ひとりひとりが充実して生活できるようになると努力している先生でも、行事の事となると、特に製作面では、教師が一方的に活動を与えて、毎年同じような製作が繰り返されることになりやすい。行事製作、とりわけプレゼント製作を子どもの側に立って考えなおしてみたい。

四月に入園したり進級した子どもたちにとって母の日や父の日は思いのほか早くやってくる。園生活にまだ十分なれず、はさみやのりやテープの扱いすらむつかしい時である。教師はひとりひとりの子どもとのつながりをつくり、個人に合わせてけんめいに保育をしている時期もある。そんな時に母の日はやってくる。母の日や父の日を期に、おとうさんやおかあさんの仕事や自分とのつながりを考えることは決して悪いことではない。問題はこれらの扱い、とりわけプレゼント製作にある。

☆ ☆ ☆

おかあさんの絵、というのはどんなに拙い絵でも、母親にとってはうれしいものである。けれども誰にもみんなに描かせる課題画となると問題がある。どんなに素朴でも天真爛漫に描ける子どもには

よいが、白い画用紙を前に涙ぐむ子や、「先生ぼくこれうちで描いてくるよ」「むずかしくてかけないヨ」という子どもが二人や三人は出てくる。母の日さえなければいいのに、と子どもに思わせるような課題では何のためのプレゼントか意味を失う。しかし現実に、おかあさんの日のために難渋し、困り切だらうか。

☆ ☆ ☆

して実用にはならない。大人はプレゼントに実用品をと考へるが、子どもが作るものだから、非実用的なものにならざるをえない。子どもが作るプレゼントは実用性など考へず、子どものレベルに立返って考え直す方がよいのではないか。

☆ ☆ ☆

六月のある年長組の学年会議で父の日のプレゼントが議題に上った。「昨年は何だったかしら」「紙粘土の筆立てよ」「今月の雑誌○○にいいのあつたわよ」「どれどれ」こんな会話を聞きながら私は疑問を感じずに入られなかつた。いつたい父の日や母の日のプレゼントというのは教師が必死になつて考えたり、保育雑誌をペラペラめくつてまるでお中元の商品カタログから物を決めるようにして決めて、一律一方的に課題活動として作らせるものだらうか。ついに「先生方、子どもたちは父の日に何をしてあげたいのか、何を作つてプレゼントしたいのかまず

教材会社のカタログには、不織布のエプロンや、ループタイどめなどがある。一見見えそうで実は決

聞いてみてはいかが?」と声をかけた。せっかく書

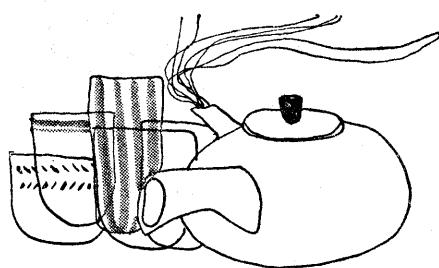
類ばさみを作ることに決まってほつとしたところに園長の思わぬ提案に「考えてみます」とその場は終わった。

M先生はクラスに持帰って、お父さんについて話し合ったあと、各自自分のお父さんにプレゼントしものを考え、材料を集めることにした。その頃クラスの活動になっていたデパートごっこに「お父さん売場」が設けられた。紙粘土や空カンのコーナー

- 1、空箱、空容器のコーナー、絵を描いたりカードを作るコーナー、を作りそれが自分のお父さんにつさわしいものを工夫して作ることになった。できたものは一人一人異なるが、灰皿、めがね入れ、鍵入れ、おとうさんの絵、ダイヤモンド、うさぎの置物、中には「せき入れ」(せきが出る時手でおさえるかわりに空パックに割ばしをつけたものを使う)などというものも出て、バラエティーに富んだ

その子なりのプレゼントができた。

あてがいぶちの活動でないためにかえって意欲的にとり組み、二つ三つ作ったり、カードなども自発的にそえられた。子どもが自分でよく考え、自分のお父さんのためにプレゼントを作るのは、それぞれのイメージを大切にすることである。結果は子どもも満足し、お父さんにも大いに喜ばれることになる。



細く長く続ける

ということ

—遊びを見つめる会—

入江礼子



それは、長女が三才、長男が三ヶ月になろうとするお正月のことでした。私は長女を連れて友人の〇さんと彼女の四才になる寸前のお嬢さんと横浜で久し振りのおしゃべりを楽しみました。なにしろ彼女は神戸、私は千葉に住んでいるものですから、一年に一度逢えれば万々才なのです。その時、私は、彼女を或る事に巻き込むことに心を決めたのです。

その或る事とは……。当時私は、長女が生まれた時にはじめた育児記録が、長男の誕生でつけることがおぼつかなくなりはじめたのを感じていました。つい日常生活の忙しさにかまけ、書くこと、つまりおもしろいと興味をもつたことにもう一度じっくりと眼をむけるという作業を怠りがちになっていたのです。いつもこれではいけないいけないと思いつつ時ばかりが流れていき、それを

喰い止めるだけの意志の力がなかなか芽生えてきませんでした。家庭に入り主婦專業ということになると、外から律されて何かをするということはほとんどなくなります。それは自由で、自分の意のおもむくままに出来るという良さはあります。しかし、それゆえ、何かをしたいと心に決めた時には、何にも負けない「意志」の力を必要とするのです。私は自分にその「意志」を持続することが困難になりかけているのを感じはじめていました。そこで、○さんの助けを借りようと思つたわけです。

なると、それが日常になってしまったゆえに、かえつて、書けなくなり、見えなくなつてしまつたのです。これではいけない、ともかく書き続けようと思いました。しかし、書かない日々が度重なつても、誰も何もいわないし日常生活が困るというわけではありません。私はこの時、つづく自分が意志薄弱に思え自己嫌悪に陥りました。何とかしなくては……。

そこで私は、○さんの上京を機に、一人で書き続けるのではなく、「友」を巻き込んで皆で、書きあう「会」を作ろうと思つたのです。自分一人ならへこたれることでも「会」を作ることで、その状況を乗り越えられるかもしれないと思ったのです。幸い、○さんの心からの賛同を得られ、先輩のTさんにも声をかけ、その年、「遊びをみつめる会」は十数人で出発しました。年四回、主な事どもが見えてくるいいようなない楽しさを何回も味わつたものでした。私にとって書くこととはそういう喜びをあとでじっくり味わうためには必要欠くべからざることだったのでした。ところが、日々我が子と過ごすよう

学生時代、自分が子ども達とふれあいの時を持った日、その日心に残つたことを文字にし、あとでじっくりそれを読みかえす、その時その場では見えなかつた様々な事どもが見えてくるいいようなない楽しさを何回も味わつたものでした。私にとって書くことはそういう喜びをあとでじっくり味わうためには必要欠くべからざることだったのでした。ところが、日々我が子と過ごすよう

現在もこの方式に変わりはありません。会員の分をコピーレンジ、皆に郵送するという方式を繰り返しています。内容は自由なので、レポート一つ一つが独立しています。

一時、内容を一号ごとに統一しようかとも思いましたが、試行してみたところ、レポートが集まらないという結果になりました。子育て最中にある人が多数を占める現在の状況では、テーマを特定すると書きそびれてしまうということになるようです。そこで又、書きたいことを自由に、ということで現在に至っています。現在、会員は三十数名、うちレポートを出して下さる方は、毎回十名前後という具合で続いています。

この会をはじめ、私は事務局という裏方をし、その特典と恩恵を大いに受けています。これは内輪の話になりますが、レポート締切日までに寄せられるレポートは、多くて一通か二通、時にはゼロということすらあります。しかし締切日を過ぎた頃からボチボチ集まりはじ

め、約二週間後には、大てい出そろうというのが毎回の相場になっています。裏方としては、締切に集まるにこしたことはないと思いつつも、ともかく一人でも多くの方のレポートを載せたいと思っていますので、「待つ」ことに徹するわけです。何をかくそ、かく言う私も大い締切日あたりに書くというのが実状であり、裏方の特典と思っているのですから……。

こうして四年が過ぎようとする今、ともかく締切のあることに助けられて、その時書いておきたいと思ったことの最低の線は守り続けられてきたように思っています。私自身のことでいえば、はじめの頃に比べ、ただ子ども達との日常を書くという考察なしの書きものに終っているのですが、それでも書きたまつてくる楽しさはありますし、内容が簡単になってきて深める余裕がないという自己反省の機会にもなっています。いつかこれを読みかえし、別の角度から見ることが出来る日も必ずあると信じて書き続けていこうと思っています。さらに、自分の書いたものを読んでもらうということは、書くこと

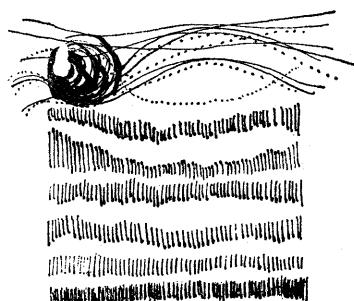
に一種の緊張感を与えますし、自分で自分を律しきれない私のような弱い人間には、丁度よい刺激となります。

今でも毎日書きとめておきたいことは多々あるにもかかわらず、そのほとんどを流して過ごしているような日常ではあるのですが、やはり心のどこかに三ヶ月に一度は書くことがあるので、「遊びをみつめる会」をしていなかつた頃よりは、「心の張り」のようなものがるように思えてなりません。それは、同好の友と進んでいるという一種の心強さにも通ずるようにも思われます。

これをしたためているそばで長女は、リリアンを編み、長男はブロックでロボット作り、「ドッキングパワーラン! ドカーン! ドヒューン」などと歌いながら遊び、二女は、長男のおこぼれのブロックをお皿に入れたり出したりして遊んでいます。こんなに子どもに恵まれた状況にあるにもかかわらず、かえって遊びの内容なりその子にとっての成長の意味などといふことがとらえにくくなっている私ですが、この「会」を基盤にして少しでも

書き続け、見続け、私なりに幼児の、ひいては人間の成長に対して、すこしでも深く洞察出来るようになればいいと思うこのごろです。

子育て中のことゆえ、一つのこととに全力投球できるほど太く強くは出来ませんが、せめて「細長く」絶やさず継けてゆきたいと思うのです。



いろいろなことを教えてくれる子どもたち ③

村石京子

保育園ごっこ

私たちの園は大学の附属幼稚園ですので、毎年お茶の水女子大学の学生が教育実習に来る期間があります。四週間の教育実習の最終段階において、実習生は全員一人で級を担当して研究保育を行なうことにしています。研究保育はまずプランニング、そして日案作成をし、そして当日は一日の保育を実施し、その後で実習生全員と附属幼稚園の職員全員が参加して保育研究会および批評会を開き、保育に関する種々な話し合いを行なうことを定例としております。

そして今年も研究保育の日となりました。実習生は数週間にわたる保育実習の成果をこの日に結集するべく、熱心に保育を行なっています。子どもたちも自分たちのことを何でも受け入れてくれる優

しいお姉さん先生、仲間同士みたいな気がするな雰囲気をもち、元氣激励とした実習生が大好きです。しかし、実習生には夢中になればなるほど、全体を見るゆとりがなくなってしまう傾向がどうしてもあります。目の前にいる子どもだけを見るのでなく、いつも級全体の子どもの動勢を把握しているようになると、頭の中ではよくわかっているのに、実際の保育の中では傍の子どももとばかりかかわっていて、離れたところの子どものことには眼がとどかないことが時折出でてきます。そのような場合でも、子どもたちは四才後半から五才になると、友だち同士の結びつきが高まってきていくので、大人とのかかわりあいがあまりなくとも一日位なら普段とかわりなく落ちついて遊ぶことが出来ます。けれど三才児の場合は、友だち同士の関係はまだ淡く、友だち同士で遊んでいる場合でも、そこには大人のしつかりし

た配慮が必要であり、それに支えられていなければ遊びも長くは続きません。

三才児の級では、数人の子どもたちは今日の研究保育の担当者と一緒にいて室内で製作をしたり、庭で「あぶくたつた」などをして楽しく遊んでいました。実習生も一生懸命子どもと同じように走ったりしています。ところがそこに加わることの出来なかつた子どもたちは、その時間が長くなつてると次第にあまり活潑に遊べない状態になつてきました。そうした三才児の心の状態が読みとれるだけに気がかりながら、今日は観察者の立場にあるので手を出さるのは控えているとき、折しも五才の男の子が自分たちでつくった大きな恐竜を持って庭へ出て来ました。その恐竜が自分たちの方へ近づいてくるのを見たとたんに、三才児の遊びはさつと浮き足だつてしましました。そして後はもう、なれば面白く、なれば恐れてただただ園庭を右往左往している状態となつてしましました。と、たまたまその様子を見ていた同じ五才児の級の女の子が二人、タイミングよく助け舟を出してくれたのです。

うろうろと走つて来た三才児を呼びとめて、二列に並ばせ手をつながせていました。きっと恐竜のいない山の方へ行きましょうということになつたのです。みんなが上手に並べたところで、さあ出かけましょうと歩き出したとき、リードをとつていた五才の女の子はちょっと後をありかえつて見ました。そして三才児の部屋の入口のところで、まだぐずぐずしていた女の子が一人いるのを見つけました。五才の女の子はいそいで引きかえすと、その子にも声をかけ、列の一番後に並ばせ手をつないでうまく仲間に加わつたところまで見とどけると、先頭に立て山へ向かつて出かけました。取り残された年少者がいないようにといふその細心な気つかいに、観察の立場をとつていた私たちは「まあ」と驚いたものです。やがて山を二~三周して來ると、「子どもの家」とよんでいる別棟になつてゐる建物にみんなで入つていきました。そこは畳の部屋で外ばきをぬいで上るのでですが、入口で靴を上手に揃えてぬぐように教えてくれました。そして部屋の中ではまるくなつて坐らせ、ままごとのお茶や御飯をみんなに配つ

ています。その行き届いた世話の仕方に感心しながらも、せっかく出来た子どもたちだけの社会に割り込むことは遠慮して、そっと見守っていました。

どんな展開があつたのでしょうか。この部屋での遊びが一段落したらしく、また庭へ出てきました。

五才児のリードで三才児は二列に上手に並びました。「何をしているの?」と声をかけてみると、「保育園ごっこよ」という答です。あ、なるほどこの五才の女の子は先生の役割をとつていていたわけです。それでどうも並々ならぬ気づかいをして年少者に接していたのを知り、何とも嬉しくほほえましくなりました。二才年長の女児たちは、三才児に対して精一杯の心配りといったわりをもつて行動し、本当の先生も及ばない程の優しさを見せてくれています。三才児は友だちと手をつなぎ、五才児のリーダーの後から楽しげに今度は違う道を通つて、山の探険に小走りについて行きました。

やがて遊び終つて昼食となり、帰りの時間を迎えたとき、三才の級の男の子がふと言いました。「あ

ーあ、今日は楽しかつたな。だって大きい組のお姉さんが遊んで下さったもの。いつもの級の友だちと遊ぶのとは一味違つた遊びに、新鮮な味わいが強く感じられたのでしょう。異年令によるグループ遊びは、三才児は三才児なりの受けとめ方があつたようですし、随分いろいろなことも教えてもらいました。そして観察していた私たちも、子どもの細やかな心づかいを見て五才児はこんなことが出来るし、三才児はこんなことを喜ぶのだということを改めて教えられる経験でもありました。実習生はまた、思ひがけない形で自分の予想とは異なつた幼児の活動がおこるということを知る体験ともなりました。

そしてまた、リーダーシップをとつた五才児は、帰りしなにこう言つたそうです。「幼稚園の先生つて随分大へんなのね。」この子が自らかって出て経験した「一日先生」、その中で彼女もまた他へ対するいたわりなどや種々のことを自分の発意で行ないながら、自らも学んでいった体験学習の一 日でもあります。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私 の 娘

三 上 祝 子



二年半のアメリカ生活を終えて帰国してまもなく、夜になると娘の由香がシクシク泣きだしたものでした。「ママ、いつアメリカへ帰るの、パパのお仕事はいつ終るので」と尋ねる由香へ、パパのお仕事は日本の大学の先生でアメリカへは研究に行っていたこと、これからはずつと日本で暮していくことを話すと、由香は悲しそうな顔をしてアメリカからも帰ったお人形たちをしつかりだきしめ、「あー、帰りたい」とつぶやきながらねむり

生でアメリカへは研究に行っていたこと、これからはず

につくのでした。私と由香はしばらくの間こんな夜をくり返しました。アメリカでは一度も日本へ帰りたいとは言わなかつたのに。そう、由香のアメリカはとても楽しかつたのです。

一九七六年七月、夫と五才の息子、三才の由香の一家四人でアメリカの中西部インディアナ州の田舎町サウスベンドに着いた頃は、建国二百年祭のにぎわいの最中で

人々は美しい笑顔をふりまき素朴な喜びをみちていました。サウスベンドは静かな大学町で大きなメイプルの木々に囲まれ町の中をセントジョー川がゆつたりとカーブして流れていきました。大学の近くに借りたアパートの裏の原っぱには、リスやかえるがはねまわり夕方には大きなホタルが舞うのでした。これからの滞在の不安をかかえた親の気持とは裏腹に子供たちは、次第に開放的になつていったのでした。ニューヨークから父親の夏季講義のアルバイトについて来た一家や、長い休みをもてあまり氣味の土地の人たちから、小さなゲストの子供たちは、ピューティフルと話しかけられだきしめられて片言の英語も話せぬうちから遊びに入れてもらつたのでした。

九月になり上の息子は近所の小学校のキンダーガーデンへ行き、由香は同じアパートに住む二、三人の子供たちと一緒にプレイスクールに入れることにしました。スクールといっても、そこはただの民家でドイツで幼稚園の先生をしていた経験のあるビスバスさんという五十才位の方がたつた一人の先生でした。自宅の広い居間と芝

生の庭を使っていました。クラスは三才児10人の二クラスで午前と午後に分けていました。居間には、ピアノもオルガンもなく子供たちの机とイスの他おもちゃやクリヨンのおいてある小さなロッカーがあるだけでした。朝の二十分位は個人レッスンで順番の子を一人ずつビスバさんのひざにのせハサミの使い方や工作の仕方などていねいに教えるのです。他の子供たちはテーブルを囲みパズルやカードで遊びながら作業中の友を心配そうに見守るといつた具合でした。その後、みんなで芝生で遊んだり、ビスバスさんの手拍子で歌つたり、お話を開いたりしながら夏の暑い日は、チャリエイドというあまざっぱい赤い飲み物をいただいてその三時間が終るのでした。由香はここで始めて家や母親から離れて集団の中の生活を覚え、物の名前や自分の意志の伝え方を経験しはじめたのでした。

由香の良き友だちアネとアクセル兄妹の母レギーナはしっかりもののスイス人で、ちょうど私たちと同じようにドイツ人の夫の仕事で一家でこの町へやつて来たので



▲ビスバスさんの庭で

すが、私と気持の通じ合うところがあり、すっかりうちとけ毎日のように行き来していました。レギーナは帰宅後の午後のプログラムを作っていました。アネたちの希望もあり私と由香もプログラムのメンバーになりました。時には由香の兄も加わりました。三時になるとぎまつてレギーナたちは、ドアをノックする代りに、「ノック、ノック」と歌うように言いながら我家をおどづれて行動開始です。夏は大学のキャンパスにある湖でひとりきり水遊びをし、湖のそばに咲いているペーベーントの花をつみ、いつまでも沈まない夕日を背にアパートに帰りつく頃は、体中ペーベーントのかおりでいっぱいでした。秋は動物園通い。小さな動物園はトラが一番の見せ物で、うさぎやにわとり、馬とまるで家畜園のようでしたが、町中のメープルが真黄色になり急に寒さがやって来てクローバードの看板が出る日まで通ったのでした。音もなくふり出した雪が何日か積りアパートのスノーカーがこしらえた雪道を通ってしか行き来することが出来なくなると室内のプログラムに変りました。曜日を決めて

お互いの部屋で子供たちと遊ばせることにしたのです。

レギーナの日に子供たちと訪ねてみると、子供部屋は楽しく遊べるよう工夫され、テーブルの上には、夏に入れたベーコミントで作ったレギーナ特製のお茶がポットに入れて用意されました。子供たちは大喜びで夏の思い出のするお茶をおかわりしました。レギーナは、外出出来ない冬は、毛糸で大きなかべ掛けを作ったり、むづかしいケーキをじっくり作ったり、夏につんでおいた花のドライフラワーにしておいたもので花輪を作ったりしていました。子供たちはレゴや人形遊びにあきるとレギーナにせがんで毛糸のかべ掛けを教えてもらったりするのでした。室内遊びは、時にケンカになつたりもしましたが、病氣と休日以外はかかさず続いたのでした。春が来て町中のライラックやもくれんの花が咲きみだれ、子供たちが自転車をのりまわせるまで由香がレギーナから教わったことは、長い冬を一人あるいは友だちと室内で過すスイス流の方法だったようです。再び夏を迎えた頃、私たちは夫の仕事でシカゴへ引越すことにな

りました。アネたちやプレイスクールの友だちは、これからが遊び時なのにと別れを悲しみくやしがりました。

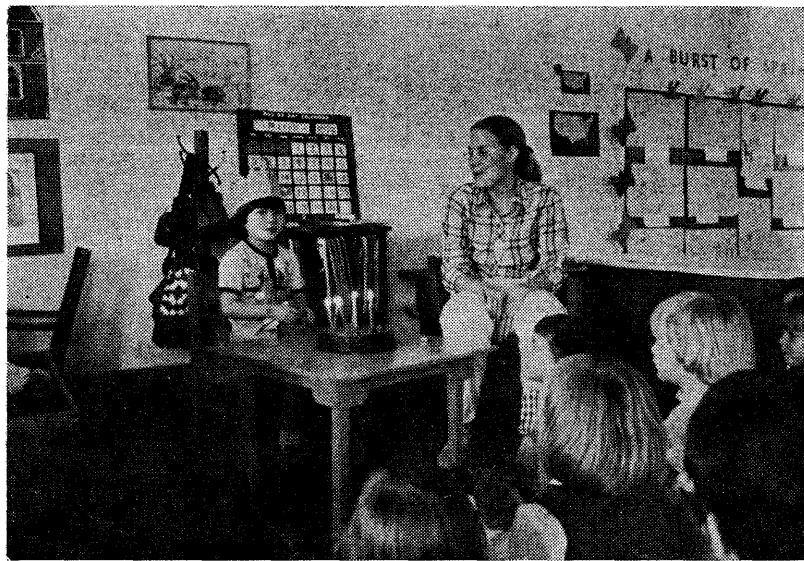
由香もさびしそうでした。

シカゴは、サウスベンドから車で二時間ほど離れていましたが、月に一度は用事で訪ねていきましたので全く知らない所ではありませんでした。美しいミシガン湖にそつた大都会です。私たちの住居となつたシカゴ大の構内にある職員アパートの周囲は通り一本向うがいわゆる黒人街でした。大学のガードマンとボリスカーが一日中巡回し、アパートの遊び場にもガードマンが立つというもののしさでしたが、アパートの子供たちは、なれっこになつていて、アパートの裏庭でキャッチボールをしたり、遊び場でママゴトをしたりして、上の子も由香もすぐ友だちになれたのでした。九月になり兄は小学校へ由香は近くの教会のナーサリイスクールに入れました。赤いレンガ造りの教会でシカゴ大学の落ちついた建物や古い造りの民家と共に美しい街並みを作っていました。午前二クラス、午後一クラスありましたが、由香は

一時～三時までの午後のクラスでした。二十人ほどの子供に先生が二人で、日本の幼稚園の教室を三つ合わせたような広い部屋は三つのコーナーを作っていました。一つは絵をかくコーナー。真ん中はピアノと、テーブルとイスがおいてあり、お話を聞いたり、うたったり、パーティを開くコーナー、もう一つはママゴトコーナーでした。子供たちは好きなコーナーで一時間ほど遊びその後、真ん中のコーナーで工作したり、歌を覚えたりして帰えるのでした。時々はクッキーを作ったり、教会のバスで図書館へ行って本を借りたり、月に一度礼拝堂で聞かれるおばあさまたちのピアノコンサートを一緒に聞いたりするのでした。きれいに着飾ったおばあさまたちが大好きな由香は、帰宅するとかならずこの日のことを報告するのでした。二人の先生はいつも話し合いながらとてもよい雰囲気でチームワークもしつかりしていました。たまにどちらかが休む日は、父兄の中から幼稚園の先生の経験のある人が頼まれるのでした。先生の一人のミセスリットは、オランダ人でした、絵の好きな由香をいつもほめて

くださるので由香はリツツが好きでした。もう一人のミスレーンは、学校を出てまもない元気の良いアメリカ人で、いたずら子には恐れられていきました。彼女の絵本の読み聞かせはすばらしく、こわい話の時は泣きだす子もいました。由香は、おやゆび姫やシンデレラのお話が好きで、「ワンスナボナタイム」とレーンの口まねで私に聞かせてくれるのでした。アメリカの歌もたくさん覚えて口ずさみながら帰宅するのでした。

シカゴでも同じアパートのドイツ人一家と親しくなり、彼らの一人息子で三才のアンドレと姉弟のように遊ぶのでした。アンドレの母親のイングリットは膨金の勉強をしており台所のすみを作業場にしていました。由香はアンドレと遊びながら作業中のイングリットの手もとをのぞきこんで、時には作り方を教えてもらったりしながら手仕事の楽しさを覚えるのでした。ナーサリイスクールのお友だちと遊びの約束をしたり、アパートの同い年のクリステーネと仲良しになり由香のシカゴでの生活が広がっていった頃、三度目の夏を過し九月の半ば私た



▲シカゴのナーサリイ 由香のバースデイ

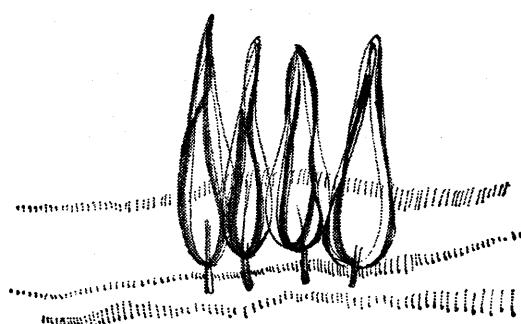
ちは帰国しました。

見なれた風景、住みなれた家、心待ちにしていた祖父母や友人たち、みんななつかしいことばかりでした。しかし、出発の時の記憶のある兄とは違って、由香にとっては始めてみるとひとしいことだったようです。まもなく兄は小学校へ行き、由香は近くの幼稚園の年長組に入りました。由香は言葉がわからないととまどい、いらだつのでした。アメリカでは家族とはいつも日本語で話していたのでさほど言葉に不自由はないと思い、そのうちなれると気にかけなかつたのですが、すっかり自信をなくしたようで、冒頭に書いた由香のくり言がつづいたのでした。朝、いやがる由香の手をひいて幼稚園につれて行き様子をみていると、確かに由香の覚えていく言葉と使い方は数が少なかつたのでした。先生も扱いに困つておられたようでした。由香が今まで学んだ生活様式は、ここでは間違いとされることが多かつたし、学校就学を前に知的作業の多いほとんど遊ぶ空間のない生活は、きゅうくつでたまらなかつたのでしょう。由香の思いがけ

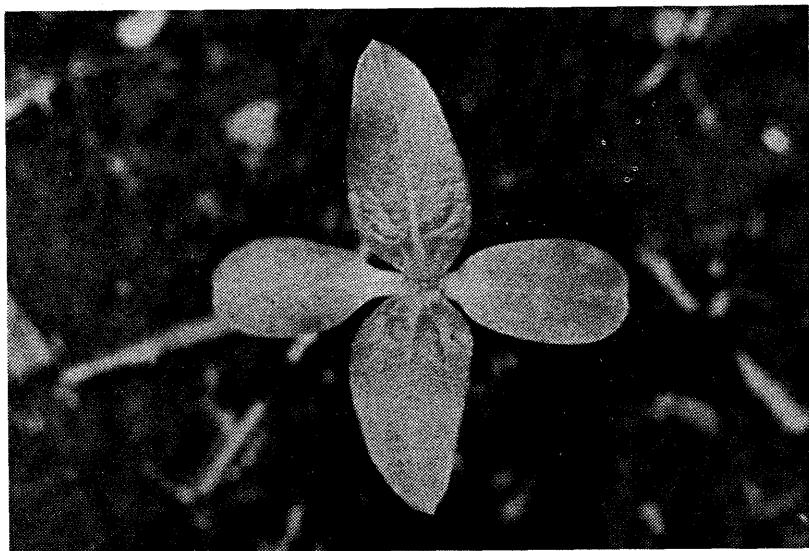
ない拒否的生活に私もやりきれないようなある日、由香は、自分の意志で自分のことを見つけたのでした。テレビに、行ってみたい絵の学校のようすがうつったという。電話番号を書きうつしたから連絡してほしい

たくなく笑いころげる姿や、ひまをみつけては何時間も手仕事を続ける由香に私は、レギーナやイングリットの姿を見るような気がするのです。

というでした。翌日、絵の学校を訪ねてみると、広瀬川に面した公園の向いの白いビルの一室で、五、六人の子供たちが絵をかいていました。進められるままにかぎだした由香には、はっとするような解放感がありました。この日から、週一回の絵の学校で、由香は言葉にとらわれる心配もなく、せかされることもなく、明るく声をかけて時には遊んでくれる先生たちにうちとけていったのでした。小学校に入つてもまだちぐはぐなしつくりしない毎日だったのでしょう。学校が終り家の近くまで来るとがまんできず、「ワーン、ワーン」と大声で泣きながら帰つて來るのでした。しかし土曜日の絵の教室の日はごきげんで喜色満面で帰るのでした。こうして由香は自分の領域を見いだすことによつて落着いていったのでした。今は学校の生活にもなれました。友だちとくつ



し た
下 萌



▲ ヒマワリの若芽

「双葉」（双子葉）と本葉が、きれいな幾何学的模様をつくっている。

左右に開く一枚がふたばで、たてに開いているのが本葉である。

ちょっと見ると何の変りもないが、ふたばは本葉が出て光合成を開始するまでの栄養源であり、貯蔵している栄養を本葉に供給しているのである。本葉は日光により光合成で栄養をつくりだす。ほんとうに不思議である。

文・写真 阿久沢栄太郎

ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状（七）

松川由紀子

(2) 就学前教育プログラム

① 概観

現代のニュージーランドの就学前教育プログラムは、一般に、自由遊び・自由選択活動プログラムが定着しているといわれている。子どもたちひとりひとりの発達、個性が最も大切に考えられていて、自発的な遊び、活動の重要性が広く認識されているのである。フリー・キンダーガルテンとプレイセンターでは、子ども中心の自由遊びプログラムが最も活発に展開されていて、多様性に富んだ遊び環境が豊かに整えられている。両者の間には、プログラ

ムの差はそれほどみられないが、どちらかと言えば、プレイセンターのほうがより自由遊びプログラムを強調しているようである。一方、保育センターやプレイグループのプログラムはさまざままで、特別に教育理論に基づいて特色をもった教育をしているところもわずかにあるが、内容的に不十分なプログラムのところもみられる。しかし、一般的には、自由遊びプログラムが採り入れられていると言つてよいだろう。

自由遊びプログラムは定着しているのであるが、批判がないわけではない。特に、家庭で英語が話されていないうマオリの幼児にとっては、こうしたプログラムだけで

は十分に言語面、認識面の発達が助長されないのでないか、という批判が出されている⁽⁵⁾。実際に、多くのマオリの子は小学校入学時に知的発達面ですでに遅れがみられ、そのためにスタートの時点ですまいでしまう傾向が顕著であった。それ故に、就学前教育においてこうした子どもたちには特別な言語教育プログラムが必要なのではないか、というのである。なお、これについて私は、後に第三節でふれてみたい。

では、次に、フリーキンダーガルテンならびにプレイセンターのプログラムについて具体的にみてみよう。

②フリーキンダーガルテンの教育プログラム

フリーキンダーガルテンは、子どもたちの社会的、情緒的、知的ならびに身体的発達を助長するために、幅広い活動が展開されるようにプログラムを用意している。

プログラムは、特に規定によって定められているわけではないが、フリーキンダーガルテン連盟の発行した最近のパンフレットによれば、子どもたちの自発的な遊び、活動を重視して、探究的、創造的、空想的、建設的、操作的ならびに身体的な遊びや活動、さらに言語、文学、

音楽リズム面の活動が十分に展開できるように、室内外にさまざまな教材、設備を用意して、子どもたちがいつでも自由に遊びや活動を選択できるよう計画されたものである⁽⁶⁾。具体的には、室内には、ブロック、描画、コラージュ、粘土、パズル、ままごと、絵本、音楽などのコーナーがあり、室外には、砂、水、大工遊び、冒険遊び（大きな板やタイヤなどを使って手作りで製作された大型遊具による遊び）などのコーナーが準備されている。子どもたちはそれぞれの興味、関心に基づいて自発的に遊び、活動を選択する。教師は、子どもたちの遊びを見守ったり、援助したり、指導したりする。特に、言語面の発達を助長したり、初步的な自然科学（動植物、自然現象、数など）に対する興味を育てるよう注意して子どもたちに教育的な働きかけをしたりする。また、一般に、音楽リズム活動や絵本の読みきかせなどをセッションの最後に、ごくわずかな時間であるが、設定しているようである。そして、天気のよい日には、しばしば海岸や公園、野原などに遊びに出かけていく。

このように、自由遊び・自由選択活動プログラムは、子どもたちの自発的な遊び、活動と教師による指導的側

面とがバランスよく組まれているものである。言うまでもなく、単に自由な遊びが展開しているわけではない。

現在のプログラムは広く関係者によって支持的に考えられていて、七七年にオークランド地区でなされた調査によれば、フリー・キンダーガルテンの大多数の教師が「自由遊びの活動は知的な発達、特に何からかの技能あるいは言語能力の達成に向けられたものではなく、中産階層の子どもたちの要求に合致しても、社会的に恵まれない子どもたちの要求には適さない」という見解に反対している⁽⁵⁶⁾。つまり、自由遊びプログラムは、知的な技能、言語面の発達にも適切で、社会的に恵まれた子どもと同様に恵まれない子どもにも適用されるものである。という教師たちの確信がみられるのである。また、この調査によれば、大多数の教師が、キンダーガルテンでは調和的な、全面的な発達が重要であると考えているのだが、やや個人的な、情緒的な発達と社会的な発達に重点を置いているようで、小学校への準備は第二であると答えている。

③ プレイセンターの教育プログラム

プレイセンターも、子どもたちの調和的な発達を助長するために、豊かな遊びのプログラムを用意している。

プレイセンター運動は、遊びは子どもたちの最高の教育者であるという信念に基づいてなされていて、活発な遊びが展開されていくことに最大の価値を置いている。そして、両親が子どもの遊びの意味を理解し、遊びに参加し、遊びのなかで子どもとともに学んでいくことが重視されている。そのために、活発な両親教育コースが展開されているのである。具体的な遊びのプログラムはフリー・キンダーガルテンの場合とほとんど差はみられない。

室内外にいろいろな遊びのコーナーが用意され、材料や設備が整えられ、いつでも子どもたちが好きな遊びや活動を選択することができるようになっている。子どもたちの自発的な遊びができる限り邪魔しないために、おやつの時間を設定しないで、おやつのコーナーを用意して子どもたちがそれぞれ好きな時に食べられるようにしているところもかなりみられるほどである。また、フリー・キンダーガンデンのように音楽リズム活動や絵本の読みきかせなどのために時間を設定することは、ふつう、なされていない。とにかく、子どもたちの自由な遊びをで

きる限り尊重する姿勢が貫かれているのである。また、プレイセンターにおいても、単に自由な遊びが展開しているだけではなく、大人が絶えず子どもの全面的な発達を促進するように、遊びのなかを教育的な配慮を怠つていいことに注意していただきたい。ただ、プレイセンターのスタッフはキンダーガルテンの教師のように（ある程度全国共通の教師養成を受けた後で）雇用された者ではなく、両親たちのなかから運動内で（各協会の計画で）教育、養成された者であり、そうした両親の教育、養成の水準は、（地域で利用できる教育条件に差があることから）協会間による差異がみられるので、フリーキンダーガルテンのように一定の水準が保たれていればではなく、教育的に不十分な水準のプレイセンターもないとはいえない。連合ならびに各協会が、出版物やパンフレット、フィルムなどを用いて、両親の教育、養成の水準を一定に保つよう努めていることは、言うまでもないことである。

(3) スタッフの養成

現在、フリーキンダーガルテンの教師の養成は六ヵ所の教育大学においてなされ、プレイセンターのスタッフの養成は各協会が責任をもつて多様な養成プログラムを用意してなされている。保育センターのスタッフは、キンダーガルテンの教師資格やプレイセンターの指導者資格などをもつ者もいるが、何ら資格を有しない者もみられる。そのため、保育センター協会では現職コースを用意して、スタッフの養成に取り組んでいる。しかし、保育センターのスタッフ養成は、まだ十分に整備されたものではなく、今日の緊急な課題になっている。

では、次に、フリーキンダーガルテンの教師養成について具体的にみてみよう。そして、プレイセンターならびに保育センターのスタッフ養成についても若干ふれておきたい。

② フリーキンダーガルテンの教師の養成

フリーキンダーガルテンの教師の養成は、運動の初期から熱心に取り組まれていて、すでに今世紀始めには二ヵ年の組織的な教師養成がなされていた。当時の養成科目は、オークランドの養成所の場合をみてみると、教育

① 概観

法、心理学と児童研究、教育史、自然研究、フレーベルのギフトの使用法、フレーベルの『母の遊戯』と『人間の教育』、プログラムのたてかた、手工、音楽、描画などであった⁽⁵⁾。これらの科目の講義、実技が午後にあり、午前中はいつもキンダーガルテンに参加して実習していた。当時の教師養成においてはフレーベルの教育論が前面でていたが、以後、次第により柔軟な姿勢になり、ある特定のものに傾斜していくことはみられなくなつた。現在の教師養成は、大筋は国によつて基準が定められているが、具体的な科目編成はそれぞれの教育大学によつて特色があり、若干差異がみられる。一般的な特徴としては、学生ひとりひとりの人間的な発達、幼児に対する専門的な理解、そして、組織的な教育技術の習得、この三点が基本になつていて、ある程度、小学校教師養成コースに統合されている⁽⁶⁾。

ここでは、クリストチャーチ大学の場合を具体的にみてみたい⁽⁷⁾。

キンダーガルテン教師養成コースの学生は、一、二年次を通じて、ほぼ毎日、午前中二時間、午後二時間の授業を受けていて、残りの時間をクラブ活動や自主的な勉

学などにあてている。教育課程は、「教育」、「言語」、「教科研究（選択科目）」、専門教育科目（カリキュラム研究）、教育実習に五区分されている。「教育」には「現代の教育」、「人間の発達と学習」、「教育の方法」、「多様な教育」、「家庭生活と子どもの発達」などの授業科目、「言語」には「教師のための言語」、「文学」などの授業科目が含まれ、そのほとんどは小学校教師養成コースと共通のものである。「教科研究」は、小学校教師養成コースの教科をひとつ選択して、二年間勉学して深めていくものである。キンダーガルテン教師養成コースの学生を対象にした専門教育科目には、美術工芸、音楽リズム、児童文学、「幼児のための科学」、「幼児のための数学」、「マオリ研究」ならびに「キンダーガルテン研究」といった授業科目が含まれ、実際的なカリキュラム関係の勉学がなされる。「マオリ研究」は、（教師として必要な）マオリ文化に対する理解が目的とされ、この国の複数文化社会を反映して設けられているものである。そして、キンダーガルテン教育実習は、一年次に八週、二年次に十一週、計十九週なされている。こうして、キンダーガルテン教師養成コースの教育課程では、教育ならびに幼児教

育に関する原理的、理論的側面の勉学とともにキンダーガルテン教育に関する実際的な知識、技術の習得が重要視されている。

これらのなかで、「家庭生活と子どもの発達」と「キンダーガルテン研究」は、キンダーガルテン教師養成コースの学生のために設けられた科目のなかでも、とりわけユニークなものである。「家庭生活と子どもの発達」は、学生がそれぞれある家庭を定期的に訪問して、子どものしつけ、発達の様子を観察したり、家族の者と話し合ったりして、家庭における子育てを理解し、両親による家庭の子育てを（キンダーガルテンにおいて教師として）どのように援助していくべきのか、について勉学することを目的にしている。「キンダーガルテン研究」は、キンダーガルテン教育に関する実際的な知識、技術の習得が目的とされている授業科目であり、教育実習を充実したものにするための基礎的な土台ともなっている。この科目の具体的な授業展開予定がシラバスに記されているが、わが国の教師養成問題を考えいくうえで貴重な示唆を与えてくれるようと思われるので、次に紹介してみたい。

この「キンダーガルテン研究」の科目は、一、二年次ともに毎週二時間、それぞれ別個に開かれているものであるが、これに密接に関連したものとして、スタッフならびに一、二年次生の全員が毎週木曜日の午前中（九時から十二時まで）に規則的にそれぞれ一定のキンダーガルテン（時にはプレイセンターや保育所など）に参加することになつていて、「キンダーガルテン参加」の時間が設けられている。つまり、「キンダーガルテン研究」は「キンダーガルテン参加」と連絡して運営されている。「キンダーガルテン研究」は、幼児期の教育に関する知識、とりわけキンダーガルテンの遊びのカリキュラムに対する理解ならびに基本的な教育技術の確立を目的に設けられている。学生は、観察記録の提出や課題図書の報告、そして、何個か出される諸課題の報告書の提出が求められ、（授業内外でなされる）討論やゼミに積極的に、主体的に参加することが要求されている。「キンダーガルテン研究」の年間授業計画を「キンダーガルテン参加」とあわせて表にしてみよう（表3）。

「キンダーガルテン研究」、「キンダーガルテン参加」ならびに教育実習は、地域のキンダーガルテンと密接に

表3

「キンダーガルテン研究」ならびに「キンダーガルテン参加」の年間授業計画

7	6	44	43	42	41	40	39	34	33	32	27
遊び理論ゼミの準備。	遊び理論に関する報告書の提出。	市内の遊び場の見学。	教育実習予定先のキンダーガルテンの見学	教育実習の準備。	おやつに関する観察。	安全面に関する観察。	祝日のため休講。	トイレならびに清潔面に関する観察。	幼児教育哲学に関する講義、幼児教育の目的ならびに価値に関する報告書の提出。	幼児教育プログラムに関する講義、フィルム「臆病な世界で成長する」。	トイレならびに清潔面に関する講義、フィルム「安全な遊び」。
遊び理論ゼミの準備。	遊び理論ゼミの開催。	子どもたちの要求に関する講義。	院中の子ども」。	子どもの要求に関するテスト。	第35、36、37、38週、教育実習。	幼児教育の目的ならびに価値に関する講義。ビデオ「キンダーガルテンにおける調理」。	おやつに関する討論、フィルム「安全な遊び」。	トイレならびに清潔面に関する討論。	幼児教育の目的ならびに価値に関する講義、フィルム「病院内の遊び」、「入院中の子ども」。	病気の子どもの遊びに関する講義、フィルム「病院内の遊び」、「入院中の子ども」。	遊び理論ゼミの準備。

過去のキンダーガルテンに関する討論。

第35、36週、特別プログラムのため休講。

第37、38週、教育実習誘導。

第39、40、41、42、43週、教育実習。

(注 新学期は二月で、十二月・一月は夏季休暇。)

③ プレイセンターのスタッフの養成

プレイセンターのスタッフの養成は、各協会が責任をもつて養成計画をたてているが、両親教育のプログラムと共に通しているものもみられる⁽²⁾。一般的には、労働者教育協会や通信教育、総合大学公開部のコース、ならびに協会主催のゼミナールコースなどで、子どもの発達、人間関係などに関する講義を受けたり、それぞれのプレインセンターで子どもの遊びの観察をして記録をとったり、ワークショップに参加したり、セッションで実習したりする。そして、養成プログラムのレベルによってペアレントヘルパー、助手、指導者、全国指導者の資格が得られるようになっている。

成面との密接な連絡は大切なことであるが、ここにみられる方式を基盤の異なるわが国にそのまま移入すること

はあまり意味がなく、むしろ、その姿勢を検討して、そ

④ 保育センターのスタッフの養成

保育センターのスタッフの養成の第一歩は、六九年の

王立健康協会の保育ワーカーの資格であった⁽⁵⁾。七一年の就学前教育探求委員会報告書は、この保育ワーカーの養成にはあまり注意を示さず、フリーキンダーガルテンやプレイセンターなどの既存の養成コースを利用して、何らかの資格を取得するように勧告した。八〇年に、保

育センター協会は王立健康協会から保育ワーカーの資格を授与する責任を引き受けた。近年はA級の保育センターが増加しているとはいえ、何ら資格をもたないまま職についているスタッフがまだ多い故に、現職スタッフの養成コースがオーネットランド専門学校に設けられ、オーネットランド大学の児童教育スタッフの協力によって運営されている。就業前の養成コースは、ウェリントンならびにクリストチャーチ専門学校に保育助手のコースがみられるだけである。教育省は、通信教育校に保育コースを設けたり、保育センター問題に取り組む助言者（パートタイムで四名）を任命したり、助言者や教育官によるワーケーションを開いて研修の場を設けたりして、保育センターの質の向上を目指している。

なお、八三年十月より、政府は保育センターへの助成を本格的に開始した。有資格スタッフや受講中のスタッ

フのいる保育センターに助成金を交付し、養成面に三〇万ドルの助成を導入したのであった。今後、保育センターのスタッフの養成はさらに積極的に取り組まれていくものと思われる。

以上、スタッフの養成について、フリーキンダーガルテンの教師養成を中心にしてみてきた。それぞれ独自にスタッフの養成がなされているが、キンダーガルテン教師の養成数の減少、成人教育を利用してしたプレイセンターのスタッフの養成、保育センターのスタッフ養成の急務などについて考えてみると、養成上に共通する部分がかなりあってもよいのではないか、さらに、統一的な養成制度が望ましいのではないか、という思いを抱く。キンダーガルテンの教師養成は国立の教育大学においてなされているが、そのコースは、（便宜上はキンダーガルテン教師養成コースという名称が使用されているが、正式には）児童教育コースとなつていて、誕生から七八歳までの子どもたちの教育を対象としている⁽⁶⁾。すでに関係者によって統一的な児童教育関係のスタッフの養成の必要性が望まれている。将来、どのような養成制度

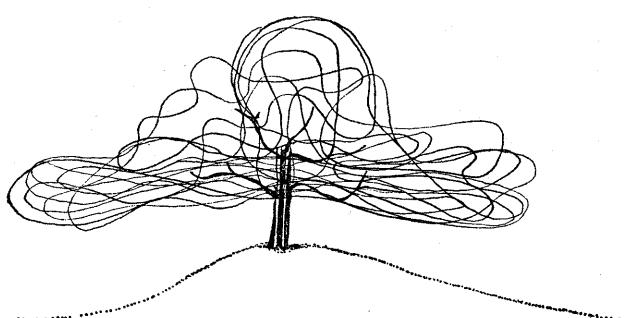
にないところのが見守りでいるんだ。

(三)女子大学)

「」のや、参照していただきたい。

註

- (5) Jane Ritchie; *Chance to be Equal*, Cape Catley, Queen Charlotte Sound, 1978, pp. 2-3. なお、新潟県立大河の「開拓者上級講師」。
- (6) New Zealand Free Kindergarten Union; *Free Kindergarten and Your Child*, New Zealand Free Kindergarten Union, 1982.
- (7) June Kean; *The Task of the Kindergarten*, North Shore Teachers College, 1979, p. 76. なお、筆者はハーベンマト教育大学の幼児教育の上級講師(当時)。
- (8) Betty Cossen; *A History of the Training of Kindergarten Teachers in Auckland 1908-1948*, Unpublished Dip. Ed. thesis, University of Auckland, 1970, pp. 6-7. なお、筆者はオータム・ハルのキンダーガルテン教師養成所の講師(当時)。
- (9) Department of Education; *Training for Teaching in Free Kindergartens*, Government Printer, 1982, p. 4.
- (10) 以下の記述は、クライベイチャーチ教育大学の幼児教育の上級講師のハギット先生(A. M. Haggitt) からのいただいた、一九八一年度の大学案内ながら記載したibusなどもあとに記しておく。
- (11) Somerset, o.p. cit., pp. 42-45. なお、具体的な養成プログラムの例が、クライベイ氏によって本誌(第八十二卷第五号)に紹介されて



(5) June Kean; *Training for Early Childhood Care and Education in New Zealand: a Partnership* in Australian Journal of Early Childhood, vol. 7(4), 1982, pp. 24-25.

(6) なお、教育省の部門名称は「」。キッターガルテン教育部門はなく、(より包括的な) 幼児教育部門へないでいる。

事故頻発傾向児に関する研究

植屋 悅男

一 緒 言

学校安全会の報告では幼児の事故件数は減少どころかかえって増加しており、子どもの事故防止策の困難さが示唆されている。

子どもの事故には、実はさまざまな条件が関連しあい事故は決して単一の原因によるものではないといわれている。例えば事故児の不注意と施設や用具の欠陥が重なって事故を招くこともあれば、また、事故児に何ら不注意がなくとも不可抗力として事故が起こることもある。

逆に、設備や用具に何ら欠陥がなくても、事故児の不注意によって起こる場合もある。

このように、事故の発生原因を大別してみると事故児本人の身体的あるいは精神的状態に原因がある場合の主体的要因と、他人あるいは施設、用具などの環境条件に原因がある場合の環境的要因の二つに区分される。⁽¹⁾

今日、これらの要因解析のための研究がすすめられてきているが、その多くは環境的要因に関する検討と対策であり、⁽²⁾⁽³⁾これらは現在保育現場において施設や設備の点検、修理、危険防止のための改善策として生かされてき

てはいる。しかし、主体的要因による事故についてはまだ未解の部分が多く、そのため現場での対策がなされにくい現状にある。

従来、事故を起こしやすい子どもを早期に発見し、その安全指導に留意することは保育上きわめて重要なことである。にもかかわらず、この領域への積極的研究はあまり行なわれていない。

こうした背景のなかで、本研究では本人の側に問題行動が生じて起ころうとする主体的要因による事故を取り扱い、事故を起こしやすい子どもの特性を客観的に評価し、その上で安全指導の処方箋をみいだすことであった。

事故を起こしやすい子どもの先行研究として、これまでにもいくつかの報告がなされている。岡田⁽⁴⁾ら、勝部⁽⁵⁾は身体発達の侧面から安全生活に不利な影響を及ぼすと思われる要素を指摘し、また、上武⁽⁶⁾、未利⁽⁷⁾は心理的側面から安全能力に欠けると思われる要素について指摘している。しかし、これらの貴重な報告も事故を起こしやすい子どもの特質をみい出すまでにはいたっていない。

二 方 法

本研究の内容は四つの部分から構成されている。第一は、事故を起こしやすい子どもの特性を神経系機能の面から（昭和五五年度）、第二は、運動工学的な立場から（昭和五六年度）、第三は、行動を起こす時の動持性を（昭和五六年度）、第四は、子どもをとりまく生育、生活環境との係りの中で、事故児をとらえ（昭和五七年度）、第四は、神経系機能を高めるための運動と事故児との関係（昭和五八年度）を検討した。以下その概要について報告する。

一 神経系機能面からの検討

（1）研究目的

本研究では、幼児期の神経発達の現状をとらえ、行動を支配する神経系機能の面から事故頻発傾向児とそうでない子の差異を検討した。

（2）研究方法

（1） 対象者：四才児三〇名、五才児三一名、六才児三

〇名の計九一名（男児四七名、女児四四名）であった。

（2） 検査方法

・神経系機能測定：C.C.No Tester CS型を使用し、

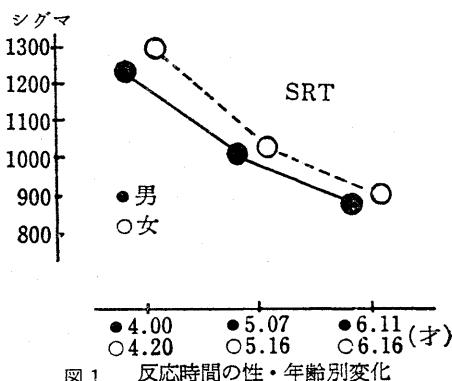


図1 反応時間の性・年齢別変化

の平均値は図1に示すとおりとなつた。

反応時間の年齢別推移をみると男児、女児とも各年齢間に有意な差がみられ、四才～六才にかけての減少が認められた。しかし、性差は各年齢ともみられなかつた。

さらに四才児の測定値を100%とした場合、他の年齢の水準をみたところ、五才児においては男女で八一～八四%、六才児では男女で七一～七二%に減少している。これは幼児の神経発達をみた朝比奈らの報告とも同傾向を示し、この年代における神経系発達の著しさを認めめた。

(2)

事故頻発傾向児と神経系機能について

事故傾向児のチェックリスト票より五才、六才児を対象に事故傾向児評価点を求めたところ三〇～二七点（平均値一一・一点）に分布していた。この結果を表1に示した。

評価得点の〇～六点までを事故傾向の低いA群、七～一二点までを事故傾向の普通なB群、一三点以上を事故傾向の高いC群と三群に区分した。

(1)

結果と考察

(1) 反応時間の性、年齢別変化

選別反応測定と動作測定を実施した。
事故傾向児調査調査・項目については、フューラーの研究をもとに大場ら⁽⁸⁾の作成した事故傾向児発見のチェックリスト票に従つた。

神経系機能測定器で子どもの反応時間を調べたところ、選別反応時間（SRT）における性、年齢別変化

表 1 事故傾向度別にみた測定結果の平均値

		A 群	B 群	C 群	※P<0.05 ※※P<0.001 t検定
入 数		16	24	21	
事故傾向点		5.47±1.8	10.04±1.9	16.71±4.2	※※※
月令 (年 令)		69.00±6.5 (5才7ヶ月)	68.08±7.5 (5才8ヶ月)	65.81±7.4 (5才6ヶ月)	No
反応 時 間 sec	S R T	0.868±0.0	0.962±0.1	1.062±0.1	A-B B-C C-A ※※※
	N R T	0.439±0.1	0.501±0.1	0.643±0.1	A-B B-C C-A No ※※※ ※※※
	M T	0.434±0.1	0.461±0.1	0.416±0.1	No
修正(N-0.5) c.c No Index		1.738±0.2	1.552±0.4	1.130±0.2	A-B B-C C-A No ※※※ ※※※
T/T ₁		2.092±0.3	2.155±0.3	2.597±0.3	A-B B-C C-A No ※※※ ※※※

事故傾向度と選別反応時間(S R T)においては各群間にそれぞれ有意な差がみられ事故傾向の高いことが認められた。また、選別反応時間を構成している神経判断時間(N R T)と動作時間(M T)に分けて検討してみると、N R TにおいてはS R Tと同様にA△B△C群の順でN R Tが遅くなっている。また、M Tにおいては三群間に有意な差はみられなかつた。このことからC群における選別反応時間の遅れは動作時間ではなく神経判断時間の遅れに起因していることがわかつた。

(ii) C.C. Noとの関係

稲葉の理論式⁽¹⁰⁾でC.C. No値を求め C.C. No 値を X 座標、事故傾向得点を Y 座標にとり相関を求めたところ負の有意な相関関係がみられ

$$Y = -6.47X + 23.36$$

の回帰方程式があらわされた。これは事故傾向度が高くなると値が小さくなることを示した。

T 研究目的

近年人間の行動を工学的に捉えようという研究が進み運動科学の

おもわめて貴重なことである。

本研究では、子どもの神経系機能の面から行動を起す時の適応支配を求め、その現状を把握し、事故を起こしやすい子の特性を検討する。

II 研究方法

- (1) 対象者：六才児、男児100名、女児107名、合計107名であった。

(2) 検査方法

- 神経機能測定：C.C. No Tester CS型を用い、選別反応測定と動作測定を実施した。
 - 事故実態調査：園内での事故調査は日常保育の中で事故を起こした子どもについて記録した。

III 結果と考察

C.C. No (Cybernetical controllability No) は人間の量的に評価することが可能になってきた。こ

のため子どもの行動を調べるため神経系機能

を客観的に測ることと
は、事故を起しやす
い子の特質を知る上で
年長児の神経系機能測定よりC.C. No指數を算
出し、その成績をC.C. No指數別に図3に示した。

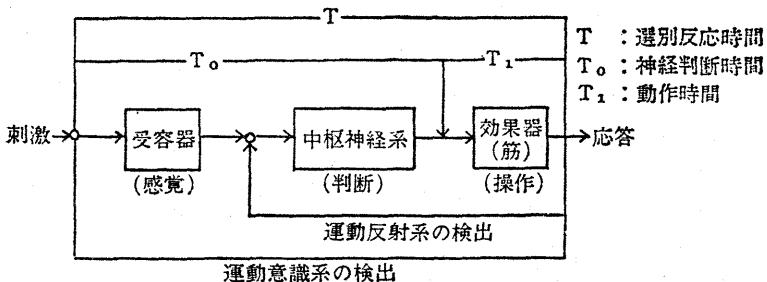


図2 人間の行動の情報処理

言葉が用いられるようになつてきた。人間の行動は制御理論を応用して情報処理で実現されると図2の流れで遂行される。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾ こうしたこ

とから人間の行動を定量的に評価することが可能になつてきた。こ

のため子どもの行動を調べるため神経系機能

を客観的に測ることと
は、事故を起しやす
い子の特質を知る上で
年長児の神経系機能測定よりC.C. No指數を算
出し、その成績をC.C. No指數別に図3に示した。

値は○・△・■・△の範囲に分布していた。また性差は認められなかつた。

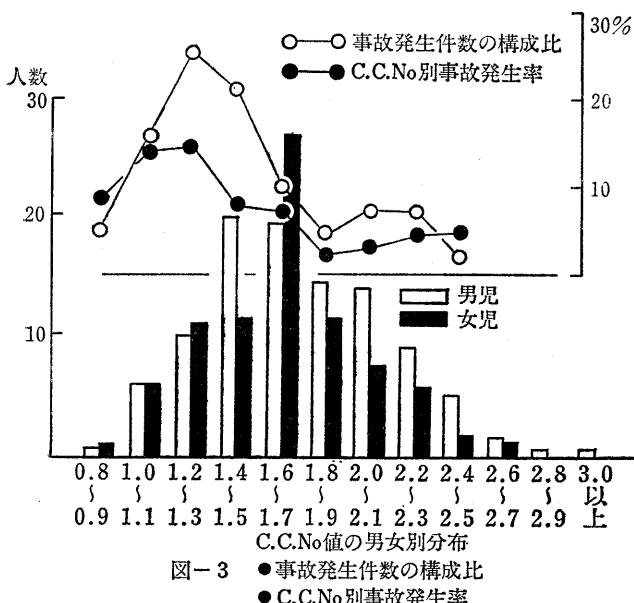
(2) C.C. No と事故発生児との関係

日常の保育の中で、実際に事故を起こし手当を受けた幼児を対象に C.C. No 値と事故発生児との関係をみた。こゝでは、本人の行動のまゝから生じた外傷児を対象に三ヶ月間の記録を用いた。この期間の該当児は男女合計三九%であった。事故発生児を C.C. No 別に集め、事故発生件数の構成比をみたのが図3である。事故発生児は C.C. No 値=0.8~2.5 の間にみられてゐるが、C.C. No 値=1.5 以下やは事故発生件数が多く発生しており、これに対し C.C. No 値別に事故発生率をみると C.C. No 値=1.0~1.3 が量も高くなつており、これに対し C.C. No 値=1.8~1.9 では著しく低下がみられた。これは C. No 値が増加するにつれ事故発生率が低下する傾向を示してゐる。

(3) 事故を起こしやすい子の神経支配

事故を起こしやすい子の神経支配の特質を検討するため稲葉⁽³⁾の判定評価によどぎき、全体を三群に分

て C.C. No 値=1.5 以下を事故を起こしやすい A 群、C.C. No 値=1.6~1.9 を中間群として B 群、C.C. No 値=2.0 以上を慎重な行動をとりやすい C 群とした。これを要素分解してみると、B、C 群に比べ A 群では動作時間には差はみられないのに行動



を起す時の判断処理時間に有意な遅れを生じ、この

遅れがこのまま対応時間の遅れになっていたことから、事故を起こしやすい子どもの特性は緊急時の応答処理に対し、動作時間に比べ判断処理時間に遅れを生じるため、結果として判断と動作の協応作用がうまくいかず、あわてたあらい行動をとってしまうことがわかった。

三 生育、生活環境とのかかわり

(+) 研究目的

神経系機能の面から子どもの動作活動における適応支配を求め、これと事故発生児との関係をみたところ事故を起こした子どもには神経支配に劣る子が多くみられた。

そこでこのような神経支配の差異を生じさせる要因をみいだすため、子どもの神経系発達に大きな影響を及ぼすと思われる生育環境とのかかわりについて検討した。

(1) 研究方法

- (1) 対象者：年長児、男子一〇〇名、女子一〇二名、
合計二〇二名であった。

(2) 検査方法

・神経系機能測定：C.C. No Tester CS型を使用し、選別反応時間と動作時間の測定を実施した。

- (3) 生育、生活環境調査：調査内容は質問紙法により実施し、その項目は生育について、出生時の身長、体重、生まれた時の状態、子どもが生まれた時の両親の年齢、養育状況、離乳期間、ハイハイの時期、立った時期、歩行開始年齢、歩行器の使用、食事の量、偏食住居、家庭環境などの項目を用いた。

(3) 結果と考察

神経支配の面から適応行動に劣る事故傾向児群について、生育環境とのかかわりの中で検討したところ

- (1) 神経支配と有意な関係がみられたのは出産時の母親の年齢と兄弟数であった。
(2) 出生児の体格、立ち始めた時期、歩行開始年齢、歩行器の使用との間には関係がみられなかった。
(3) この他、神経支配とかかわりを持つと思われる因子はむしろ乳時期以後、三才～六才の時期で遊びや運動の経験といったものが大きな影響を持つものと示唆された。

四 神経系機能を高めるための運動と事故との関係

(一) 研究目的

本研究では事故の実態ならびに事故と身体機能との関係を求め、さらには子どもの安全行動に必要な身体機能を高めるための長期的運動が園内の事故発生にどのような係りを持つのか検討した。

(二) 研究方法

(1) 対象者・四才児（男児一三〇名、女児一六六名）

五才児（男児一四二名、女児一四五名）の計五八三名であった。

この中から神経系機能を高めるための運動を積極的に取り入れたグループを積極的運動群とし、四才児の中から三クラスを選び（男女計一〇七名）、五才児の中からは週一回課外の時間を利用し、健康な体づくりをねらいとした体育教室に参加している子どもたち（五二名）を選んだ。積極的運動群を除いた群を対照群とした。

(2) 調査項目・事故の実態調査、生育、生活環境調査 C.C. No 測定、体力測定（二五m走、上体そらし、ボール投げ、ジグザグ走、サイドステップ、平均台

歩行）などを実施した。

(三) 結果と考察

(1) 園内事故の発生状況をみてみると転倒やつまづき、激突、転落などがみられた傷害の部位は、手足が主で次に顔面、口の順となつており、その程度はか

なり傷から打撲、捻挫と種々であった。

年間当りの事故発生率は五才児よりも四才児の方が高くなつており、また、性差はいづれも認められなかつた。

園内事故を発生原因別にみてみると、鉄棒から落ちたり、ドアに手をはざまれたり、他の遊具から落ちたりして環境的要因の強く影響しているものが八・六%で、後は殆んどが自分で転倒したり激突したりして、本人の側に原因がみられる主体的要因によるものであった。

(3) 神経系機能を高めるための運動処方・軽運動、スキー、ジグザグ走、ボールゲーム、障害とびっこし、ゲーム運動、はしごを用いての運動、サッカー、ゲーム、遊具を利用しての運動等を実施した。

事故を起こした子どもの身体特性をみるため五才児を対象に園内事故を起こした群と起こさなかった群で体力との関係をみたところ、二五m走、立幅とびには差はみられず、ジグザグ走、サイドステップで事故群の方に成績が劣る子どもが多くみられた。

すなわち事故児の特性として、身体機能面からはエ

ネルギー的体力をコントロールする調節機能の側面

に低下が認められた。

(3) 神経系機能を高めるための運動と事故との関係

事故児の多くに神経系機能面に劣る特性がみられた。そこで積極的運動群に対しては、この側面の機能を高めるような運動を実施した。

積極的運動四才児群では一学期の事故発生率においては対照群との差はみられなかつたが、二学期以降においては運動群の方が対照群よりも事故発生率が少なかつた。

積極的運動五才児群では対照五才児群に比べ一学期には事故率では、高い頻度を示したが二学期以降においては事故発生率は減少がみられた。
次に、身体機能の側面からこれらを評価すると、

積極的運動四才児群、五才児群とも運動実施以後においてはジグザグ走、サイドステップ、ボール投げなどにおいて対照群よりも優れた成績を示した。また C.C. No. 測定による選別反応時間の成績においても同傾向がみられた。

三 要 約

事故を起こしやすい子を早期に発見しその安全指導に留意することは保育上きわめて重要なことである。本研究では、本人の側に問題行動が生じて起こる主体的要因による事故を取り扱い事故を起こしやすい子どもの特性を客観的に評価し、その上で安全指導の処方箋をみいだすことであった。そのため、園内における事故児を対象に事故を起こしやすい子どもの特性を明らかにするため、事故児との関係で子どもの行動を起こす時の各神経の働きや、情報刺激に対する応答の仕方、反応の仕方をとらえ、また、子どもをとりまく生育、生活環境について、さらには体格、運動能力的な側面から事故児の特性を明らかにした。

その結果、事故児の特性にはいくつかの興味ある結果

が得られたが、なかでも大きな要因としてみいだされたのは、行動を起こす時、その身体を支配する神経機能の悪さであった。そのため、この機能を高めるための運動遊びを導入することで、園内の事故発生率にも大きな改善効果が認められた。また、身体機能の面からも神経系機能を主体として機能の向上をみせ、子どもたちの明るくて活動的なたましさがみられた。

以上のことから、人的側面からの対応が子どもの事故に大きな影響を及ぼすことが明らかにされた。

最後に、本研究をここまでまとめあげるのに五年の年月を要した。しかし、この領域を体系化するためには、まだまだ課題が山積している。今後はいろいろなタイプの事故事例を取り入れ深く検討したい。

(中日本体力問題研究所)

引用文献

- (1) 大場義夫：「子どもと安全」、東京大学公開講座「こども」、東京大学出版会 八〇一八二頁、一九七九年
- (2) 須藤春一：「事故と救急処置、乳幼児保健指針」、日本小児医事出版 二四四一~二五三頁、一九七一年
- (3) 近藤政明編：「安全指導のとらえ方、健康・安全・性の指導」、教育出版 三二一~四〇頁、一九七一年
- (4) 岡田幸夫他：「幼児の保健」、朝倉書店 二一~五三頁、一九七一年
- (5) 勝部篤美：「幼児のからだの特徴、幼児体育の理論と実際」、杏林書院 八九頁、一九七一年
- (6) 上武正二：「新発達心理学」、金子書房 二三一~一三五頁、一九五一年
- (7) 未利博：「体育心理学(上)」、逍遙書院 一六八~一七〇頁、一九六〇年
- (8) 大場義夫他：「幼児の安全管理と指導、幼児の健康」、福村出版 二〇七~二〇八頁、一九七三年
- (9) 朝比奈一男他：「姿勢制御からみた調整力の研究、体育の科学」、一四九一~一五五頁、一九七五年
- (10) 稲葉正太郎：「C.C. No. テキストの解説書、稲葉適性研究所」、七七一二頁、一九七八年
- (11) 稲葉正太郎：「C.C. No. についての解説」、東京大学生産技術研究所 七七一三頁、一九〇三年
- (12) 調技孝治：「運動学習における巧みさ、体育の科学 Vol. 23、二七九~二八三頁、一九七三年
- (13) 塚原進：「人の動作におけるフィードバックとフィードフォワード、生体運動機構とその制御」、杏林書院 二三一~二五一頁、一九七二年
- (14) 長田晟：「身体運動調節のシステム」、道和書院 五一二二頁、一九七七年

京都を訪ねた昨年のこと、府立総合資料館の幾重もの扉を鍵で開けた向うの、玩具保存庫で、日本各地の郷土玩具を眼のあたりにすることができました。石沢誠司氏は、私どもを案内して下さった玩具部門の専門員で、その折、約した依頼が実り、今号の掲載となつたのです。

郷土玩具のうち、私どもは、伏見人形の魅力に吸い寄せられていきました。学業成就をかなえる牛乗り天神、火防せの神であり、安産の守護もする布袋、子どもの湿疹・クサを食べてくれる牛、夜泣きをとめる鳩、子どもが亡くなった時、埋葬に用いる友引き人形、デンボ・ツボツボと呼ばれる器類……、どれもこれも呪術的な魔力を秘めた土人形でした。

さて、旅の終りに、五色の楓を観るべく泉涌寺へ足を向け、塔頭廻りをしていましたのこと、伏見人形とは、このように使われていたのかと、さまざまと眼にとびこんできた光景があります。七福神の

一つ布袋をまつるその塔頭では、安産祈願を司どり、岩田帯を授け、井戸から独沽水を汲みあげます。そして椎の実がござれる境内の一角には石船があり、そこには、安産の願がこめられた伏見人形の布袋たちが、たくさん堆く、積みあげられていました。色もはげ落ちた古い布

袋たちは、にこやかに笑っていましたが、どれだけの京童をこの世に連れ来た

つたことでしょう。

僧で、位や名声を望まず、生涯、杖と袋で、放浪生活を送りました。日本では、

布袋は唐子と取り合わされ、絵画に頻繁に登場してきますが、袋の中から、子ども

もたちがワアッと出てくる図像など、布袋は子どもの宇宙を支える主管者の如き

趣きがあります。大きな腹をした、のど
へこ行きよ、「三二・四里二・以二、ミー

かな布袋はどこか狸にも似ていますが、狸は徳利とお通いを手にして、子ども

とほ遊んでくれそうにありますん。
〔美〕

幼児の教育 第八十三卷 第五号

五月号

定価三〇〇円

昭和五十九年四月二十五日 印刷

時和五十九年五月一日發行

東京電気大学附属幼稚園内

発編行集人兼本田和子

東京都文京区大塚二ノ一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所
日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所
図書印刷株式会社

東京部千代田区神田小川町三ノ二

発売所
株式会社
フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

スナップでくっつく不思議な積木

クリック48

アルプスのふもとで生まれた、
まったく新しいタイプの積木。
フレーベル館から新発売です。

ひとりでも、みんなでも。
楽しく遊べる「動く」積木。

アルプスで育った白木を材料にして、
高品質に仕上げたニュータイプの積木(クリック48)。ヨーロッパの子どもたちに、豊かな広がりのある夢を与え、伸びやかな創造力を育んで大好評。材質は、素朴な味わいのある心地よい白木ですから、堅牢性はもちろん、角に丸みをつけることで安全性にも優れています。

LECCO clic48

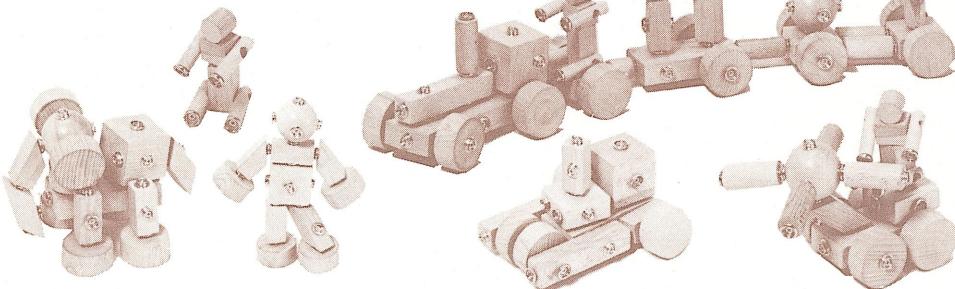
新発売 48個入り
¥7,500



クリック48の特長

- 画期的なスナップ型積木——取りつけ、取りはずしが簡単。しかもジョイント部がクルクルとよく動き、ダイナミックに楽しめます。
- 堅牢・高品質の白木製——見た目にも美しい白木は、丈夫でしかも角に丸みをつけてるので安全です。
- 楽しさ広がる15タイプ——積木の形状、スナップの位置、数によって15タイプに分かれ、計48個で1セツ(1)いろんな型に組み立てられます。
- 収納・携帯に便利な円筒ボックス入り——美しい円筒形のボックスにおさめられ、持ち歩きやすく、片づけやすく、じやまになりません。

くみたて例

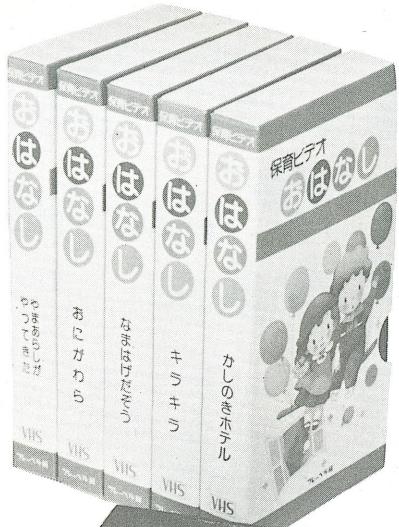


本来、積木は、手さきの器用さと創造力を伸ばすための教育玩具。子どもたちには、なるべく自由な発想で、可能な限り伸び伸びと積木の「制作」に没頭させてあげたいものです。

子どもたちが、限りない可能性を胸に自分の夢をクリック48で作りあげようとするとき、「こんなふうにも作れるのよ」といったヒントを与えてみてはいかがでしょう。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・店舗・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



Victor
ビクタービデオカセット
BR-7110 ¥139,800

絶賛発売中 保育ビデオ おはなし

シリーズ(全24巻)

各集 2巻1セット ¥25,000

おはなしビデオシリーズは、幼児に夢とやさしさ、そして勇気を与えます!!

年間12集を毎月1集(2巻1セット)ずつ発売いたしますので、年間購入をぜひお奨めいたします。

やっぱり、ビクター。鮮やか、簡単、安心、3拍子そろった有能ビデオです。

- 操作ボタンは、大きく、見やすい、誰でも簡単、解りやすい。
- 4ヘッド8時間。つまり、画像美しく、テープを使いわけ。
- シャトルサーチで、飛ばし見。時間は短縮、能率はアップ。
- ここぞと思う重要ポイント。「一時停止」ボタンで、じっくり検討。
- プライベート・タイムでも、ビデオでしっかり予約録画。
- これから、園の保育に最適なビデオカセット。



集	タイトル	原作	集	タイトル	原作
第1集 (発売中)	アンパンマンとばいきんまん かしのきホテル	やなせ・たかし 久保 喬	第7集 (7月発売予定)	おかあさんのふえ にげだしたおおおとこ	椿 宗介 こわせ・たまみ
第2集 (発売中)	キラキラ なまはげだぞう	やなせ・たかし 馬場 のばる	第8集 (8月発売予定)	ロンロンじいさんのどうぶつえん ことりのふえ	筒井 敬介 神戸 淳吉
第3集 (発売中)	おにがわら やまあらしがやってきた	前川 かずお 武井 博	第9集 (9月発売予定)	にじのはしがかかるとき ハムスターのドンパ	今西 赤坂 祐行 三好
第4集 (発売中)	とらねこめいたんてい こびとといもむし	武井 博 肥塚 彰	第10集 (10月発売予定)	ライオンそらをとぶ あざらしチック	安藤 富永 明義 秀夫
第5集 (5月発売)	ラーメンてんし おにのたいこ	やなせ・たかし 前川 かずお	第11集 (11月発売予定)	ねずみのチャップ おうさまはだれだ	武井 向 牛男
第6集 (6月発売予定)	五つのはなのえき アンパンマンmajyoのくにへ	鶴見 正夫 やなせ・たかし	第12集 (12月発売予定)	ちゅうしゃのこわいムーじいさん さいごのおきやくさま	森田 平塚 文 ウタ子

*保育のために生まれた、オリジナルのおはなしシリーズは、子どもたちにも喜こばれ、保育現場でも楽しく活用出来ることを確心いたします。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館